

す。いゝ加減にだまされるやうな気がして」

「だまされるつて」

「つまり——死の解決だとか——」

安井氏はまた黙つた。しかし別に批評は加へなかつた。

「要するに初めつからの他力は厭なんだね」

「さうです」

「ぢや自力ならば」と、眼近かの苔臭い池を見ながら喋つてゐた安井氏が、結論のやうに彼へ振り向いた。「猶更君に力のない間は仕様がないうぢやないか。始めの一二年掃除ばかりするぐらゐ仕方がないさ」

彼は口を噤むだ。明快に云つてのけられたと思つた。が、やはり彼は淨心寺でのすべての日課が二三年先きのための豫備的訓練に過ぎないのだと知つてしまふと、もう豫定の日數を伸ばしてまでも滞在する氣力を失つてゐた。それはあの無邪氣なほどに猛烈な鐵心に對しても云へた義理ではなかつたが、しかし彼はやはりその心持を打ち消すことが出来なかつた。——參禪の道の妨げにはなるがしかし自分の全部にとつては一概にさうも云へない場合がありはしないか。かう二

通りに物を考へる點で、彼はやはり純粹の弟子らしい弟子たる資格を失つてゐた。

その翌日の午後だつた。小作りな麗しい中門の陰を掃いてゐる時に、彼は水泳寄宿舎で一所に暮した同級生の木村からの手紙を受け取つた。

「僕はこの間前橋から赤城山へ行つたよ」と木村が旅びとらしい快活さで書いてゐた。「山の天邊に湖水があつてそれを外輪山がぐるりと取り巻いてゐるのだ。つまり湖水は昔の噴火口なのだ。外輪山の傾斜はいやに柔かで、森には牛が放牧してある。牛が多くて散歩のをりにちよつと弱る時もあるがね。——宿屋は湖水のふちに建つてゐて宿賃が非常に安い。それから面白いことがある。その宿屋の主人の膽入りで、松峯順一さんが——無論「S」誌の同人の松峯さんだが——宿屋の裏手にひと間ましかかない小さな藁小屋を炭焼男に建て、貰つて住んでゐるのだ。奥さんとふたりきりで、この五月頃から來てゐるのださうだ。松峯さんは今も小説は書いてゐないやうだが、大變落ち着いた話しいい人だ。僕はもう一度出かける。君はどうだね。雷と蚤を我慢するとして、氣があるならば返事をくれ給へ。——K」

木村は彼が休暇の間家にゐたくないのを知つてゐる筈だつた。して見れば、この便りは木村の

もくろんだ親切からであつた。

海からの解けさうな雲が中門の眞上を通つてゐた。彼は「S」誌の松峯氏がその一二年小説の發表を止めて田舎に去つてゐる事を知つてゐた。また松峯氏がその一二年兩親の家から離れてしまつてゐる事も木村から聞いて知つてゐた。そしてかういふ事情の松峯氏の生活が、現在の自分に何か力になる暗示を與へはしまいかと、彼は一寸想像した。さういふ想像が、その人に對しては好奇心めいて禮を失してゐるとは思つたが。――

掃除が終ると、彼は方丈の縁に出てゐる和尚に近づいた。木村が念入りに封じて寄こした快活さに刺激されて、彼は和尚に云ひそびれてゐる挨拶をも氣樂に果せさうだつた。

「何か用かね」

と、和尚が彼の顔色を見て尋ねた。

「やつぱり豫定どほりの日に失禮いたします」

「參つたね？」

ひと言云つて、和尚は笑ひ出した。

「いえ參りません」

彼も笑ひながら冗談まじりに應酬した。それは丁度最初の日の方丈でのあの問答にそっくりな取り合せだつた。しかしそれでもふたりは、採點試験のすべて済んだあとの試験官と受験生のやうに、笑つて、寛いで、蝸が崖で單調に啼く時刻までも雑談した。

十一

上州の水沼驛から三里ほどの山道を、木村と彼とは赤城の外輪山になつてゐる鳥居峠へ登つて行つた。木村の一行に彼が加はつて都合四人だつた。

まだまだ酷しい暑氣のこもつてゐる東京に彼は二日しか留まつてゐなかつた。水沼からの峠道は近いかはりに急でもあつて、くつきりと浮き出た樹の多い頂がすぐ眼の前に見えながら、ついに折りの登り坂はなかなか抄らなかつた。宿の番頭が先に立つて、誰もいつの間にか景色に無關心になつてしまつてゐた。

不意に四人は軟かい草地に出た。風といふよりは氣流のいかにも自由に通つてゐる高い草地であつた。道はそこから緩やかに下る一方で、その道の盡きるところに光つた、動かない、水の色が見えた。漁村とはちがつて潮の音の少しも聞えない水だ。なるほど外輪山の底にある湖水であ

つた。

空氣が奇妙に軽く、彼は何か間の抜けた心持だつた。ひと息入れながら意味もなく四邊の草と石とを見廻した。眞空管を聯想するやうなこの音もない場所に来て、満足してゐるのか物足らないのか分らなかつた。またそれは大宮、熊谷、高崎と、日射の強い車台に絶えず揺られて來たあとで急に汽車の停つた時の心持に似てゐた。

一種の快い錯覺であつたが。……………

今度は、彼等は宿屋のあるといふ湖べりの方角にたゞ下りて行けばよかつた。牧牛の糞などの散らばつた静かさで、何の緊張も要しなかつた。だが彼は、その緩やかな傾斜に足をまかせながら、四人のうちで自分ひとりが何か肩のいかつてゐる——やうな心構へを持ちつゝあるのに氣がついてゐた。それは水泳寄宿舎から寺へと續いて、自然に附いた習慣に違ひなかつたが、大氣の底ぬけに軽い此處では、それが何となしに可笑しく門違ひだつた。

廣い野原の坂道で彼はしきりに草と石とを見廻した。——

しかし門違ひな心持はその翌日も繰り返された。藁小屋の窓から松峯氏は無雜作に

「どうぞ。あがりたまへ」

と彼等を招いた。彼は楯の木陰の入口に立ちながら、その聲に豫期しない特殊な親しみの籠つてゐるのを感じた。まつたくそれは昔から彼等の學校の卒業生によく聞く發音だつた。藁小屋の窓から學校の匂がした形である。

小屋は内まで炭俵と同じ質のもので出來てゐた。四疊ほどの廣さの部屋は眼に快い程度の影をこしらへてゐた。彼等はごたごたと松峯氏に膝を突き合はすやうにして坐つた。影のなかで白い皮膚が目立つ、頬の豊かな、品のいゝ奥さんは、疊の僅かな餘地で茶を入れながら狭い有様を可笑しがつた。

霧の日の用意なのだらう、隅に女羽織が疊んであつて、紅絹が少しばかり見えてゐた。それがこの藁の天井の下に若い婦人のゐる艶やかさを漂はしてゐた。

松峯氏は寛いで、暢氣な話をつぎつぎに持ち出した。暢氣な話を楽しんでゐた。この人は我が新鮮に張り切つた小説を書く短篇小説家であつた。しかしこの人は一年ほど前に不意に制作を中止したのだ。そして今は兩親の家から離れてしまつてゐる譯だ。——彼はこれらの事實を計算して何か鋭い、深刻めいた空氣をその藁小屋に豫期してゐた。が、彼は其處に大きい眼の和らいだ、

額の廣い、手のがつしりした、そして我を靜かに制御してゐる人をしか見出せなかつた。それは自分の子供のやうに自分を休養させてゐる人だつた。休養の濟むのを待つてゐるらしい人だつた。それで彼は思ひがけない他力たよりきの香りを、自力の強い點に感服した人の部屋で鼻いでした。

二時間あまりも遊んで彼等は外に出た。奥さんが洋燈を用意するのを見て立つたのだ。歸り路に山つゝじの多い湖べりの草原で、彼等は遠くに牛飼を見た。味噌籠を抱へた牛飼は「バア、バア、バア、バア」かう長く呼んで外輪山の諸方に散らばつてゐる牛を集めてゐた。それがここでは日暮のしるしだつた。やがて牛が眠れば夜の證據だつた。牛も牛飼も遠い祖先傳來の生活力で生活してゐた。——生活を極端に人工的な課目で割つてゐたあとに、本來の時間のない土地を當てもなく散歩するのはやはり勝手の違ふ不思議な心持だつた。

文學通の木村は松峯氏に就ていろいろの智識を持つてゐた。しかし彼はあまり話を其方へ向けなかつた。二十の彼はいい學問をした譯だつた。彼はたつた二週間で何か一段と違ふ人間にならうと意氣込んでゐた。またそれを當てにしてゐた。彼は人生を抽象一點張に考へてゐた。そして壁に打つかるやうにその人生に打つかつてゐた。が、さぞさうもあらうと思つた松峯氏は、たゞ眼の前のありのまゝの現實生活を叮嚀に扱つてゐる人だつた。——

「お寄り遊ばしませんか」

と頬の豊かな奥さんは、彼等が檜林を通つて外輪山へ遊びに行くのを見かけると、窓から誘つた。奥さんの聲をかける時は松峯氏も暇な時だつた。しかし何氣ないやうにして休養してゐる松峯氏の小屋へ、彼等は自然と書物の話などはせずにトランプを挑みに出かけて行つた。

「こはいわ。こはいわ」

善良な奥さんは扇形に擴げた持ち札を胸に隠しながら、狭い部屋に聲を響かせて、危おやっくなると良人の指圖に頼る様子だつた。なるほどさう云はれて見れば彼等は遠慮してゐるやうで、やはりその齡らしい一本調子に肉迫する戦ひ方をしてゐた。

しかし油が乗ると松峯氏もその短篇の作者らしい、明るく張り切つた我をほんの少しばかり見せた。煙草の烟がすぐ頭の上の天井にぶつかつて、それから檜の下枝にまつはつて行つた。

「これでもか」

「えゝよござんす」

と、眞向ひの彼が面白がつて松峯氏に應酬した。

「ぢやあこれはどうだ」

「少し参つたが、かうやれ」

「そろもう一枚」

「よし、行きます」

彼は力を入れて札を卓の上へ投げて行つた。

「君もなかなか遣るやうになつたなあ」松峯氏は彼のその不器用な格好に笑ひ出した。「ふうむ。隅に置けないぞ。——ゆうべも夜中まで舟を出して騒いでゐた。君達だね」

「はじめはお音無しかつたのにね」奥さんが傍から云ひ添へた。「もう皆さん、ちやんと分りましたわ」

「段段正體がでせう、奥さん」と木村が引き取つて云つた。「こいつははしやぎ出すと始末に終へないんですよ。御存知なかつたでせう。つまりむら氣なんですね。この間うちは一寸ね——まだまだ本音が出て來ますよ」

「さう、來た時よりまた元氣になつたの。ぢやあ、いゝ威勢で歸れるわけだね」

と、和らいだ氣持の松峯氏は大きい眼で彼を視しらべてゐた。

「木村君の方は、それあ始めつからだがね」

しかし彼は笑つて札を切りながら、松峯氏の云つたその「元氣」を、ゆつくり手足を伸ばしてゐるといふ意味に勝手に釋つてゐた。——彼はまた新らしい心持で新らしく札を配つた。

「そら、新奇まき直し、もうひと勝負どうです」

(昭和二年十二月作)

女
優

しばらくの間、伊東修吉はその女優が頬も眞近まぢかに坐つたために具合がわるくなつたのか、それとも彼に気がつかずにゐるのか、それを観察してゐた。それから、大體彼といふ人間に挨拶をしたくないのではないかとも思つて見た。さういふ事も向うにとつては一理あつたからである。或る道義心をはたらかすと、修吉はこの小さい女優——毬子に對していつも一種の引け目を感じてゐた。西日の強い夏の午後であつた。修吉は本を伏せて毬子が眼をひらくのを待つた。ひどく揺れる省線電車の窓際で、毬子は氣分でもわるいやうに眉を寄せながら、髪を風にあてゝゐた。彼にはそれが只事でない疲労に見えた。同時に、いかにも巧みに挨拶を外らしてゐる仕草にも思はれた。この曖昧な點にやはり女優たる面目があつた。——

眼をつぶつてゐる間、毬子は小さい薬瓶を膝に置いてゐた。地味な着物を着てゐた。さう云へばずつと前に新聞で毬子の結婚の噂を読んだ覚えがあるから——それを機會に舞臺を退いたのではないかと、そんな風にも修吉は考へた。

レールが大きく迂廻して、西日が山ノ手の高臺から眞直に差し込んで來た。修吉は立つて鎧戸

を締めた。すると、毬子は眼を開いて不愛想に彼を見た。平凡な、何の態も持つてゐない眼差だつた。

氣が付かないでゐたのだ。——と彼は判断した。

そして修吉の判断が當つたのだ。車臺の動搖によるけながら彼が挨拶した時に、毬子は忽ち以前のどほりの勝氣な、女學生風な、小さい女優に一變した。小さい女優といふのは修吉の第一印象なのだ。毬子が一座の最年少女優であつた初演の時の印象なのである。

「伊東さんの修吉さん。——さうだわ！ほんとうに修吉さんね」

あまりに子供らしい氣の付き方なので、修吉も打ち解けて笑ひ出した。聲が以前よりも嘎れてゐるのだ。しかし、修吉は兩側の吊り革の白い輪が音を立てて揺れてゐる電車のなかで、非常に古い知り合ひに出會つてゐる事實に今更氣がついてゐた。彼の苗字を呼ばずに名を呼ぶ人はごく少ないのである。

「さつきから、眠てゐるところを見てらしつたんですね。厭な方、起して下さればいいのに」毬子は云ひ譯のやうに先刻の疲れた擧め顔を、もう一度繰り返して見せた。「今年は暑さ負けをしたんですよ。毎日三十分たつぷり乗るもので、電車ぢやあ何時もかうやつてますわ。ほんとに早く

起して下さればいいのに」

「新宿だつたか。あの邊から氣がついてたのだけれども——」

あまり變つて見えなから、と云ひかけて、修吉はそれが若さを失つてゐない——二十代の婦人に云ふべき言葉ではないと思ひ直した。

「え、大久保からいつも乗るんです」

そして毬子は獨り言のやうに、

「あなたもあつちの方ぢやないかしら。誰かにそんな事を聞いたけれど」

「さうです。ひと停車場先きです」

「たつたひと停車場？——お子さんは大きいんですか」

近くに住んでゐる者同志の挨拶を危うく口口のぼせかけて、毬子は急に話題を替へた。修吉にはそれがよく分つた。彼は毬子のその心事を憐んだ。といふのはその瞬間の毬子を愛したのである。

「さうさう、ひとつ子供をお見せませう」と修吉は、彼女を眼近かに視つめ、世辭ではないのだといふ意味を籠めてしみじみ云つた。「遊びにいらつしやい」

毬子は軽く聞き流して笑つた。

「遊びに？——そんな事していいんですか」

「どうしていけないんです」

しかし修吉はそれ以上を言はなかつた。彼の家が毬子の家に對して昔からどういふ態度を取つて来たか、よく承知してゐたからである。すると毬子は、聞きにくい事は却つて遠慮なく聞いてやるのだといふ様子を見た。古くから修吉の知つてゐる、毬子の持つ反抗心なのだ。

「お姉さんは御丈夫？」

「丈夫です。名古屋にゐます」

「お従姉さんは。——松江さんは」

「別に變りはないんでせう。よく知りません。——福岡にゐます」

従姉を話題にのぼせた時、修吉はやはり毬子の前に、何となく弱者の位置に立つてゐた。彼は従姉にはあまり興味のないやうな語氣を漏らした。彼はその弱身をはつきり感じた。そこで——彼の方でも反撥した。彼も故意と聞き返した。

「兄さんや姉さんはどうしてゐます」

「ちつとも便りがありませんわ」

「何か新しい探偵物の主役になつたとか」

「さうですか。兄の出る映畫もつい見ませんの。ハリウッドの町外れになかなかいゝ家を買つたといふやうな話を、却つて彼地あちから歸つて来る方に伺ふだけですわ。お金も大分溜つたやうね。結構な事だと思つてますわ」やはり女學生風の茶化した物言ひをやめなかつた。「それよりか、あなたはどう？」

修吉はしかし、娘つばい皮肉を豫期して笑つてゐた。

「笑つてゐられるやうならば結構ね。わたしのやうなコワレ物になつてはお終ひよ。昔は病院なんて、覗いても見なかつたのに！」

修吉にはそれが、毬子の出世役であつたチェホフの芝居の臺辭のやうに響いた。つまり冗談には響かずに、弱弱しく、眞實らしく、しつとりと響いた。

「いや。この暑さは誰にもいけないんですよ。僕もこの間うち、たうとう仕事を休んでしまつた」
「何云つてらつしやるの。僕もなんて。——わたしが遊んでゐられる身分に見えますか」

かういふ手厳しさには馴れてゐたものゝ、流石に彼は話の繋ぎを失つて黙つてしまつた。昔は

これも愛くるしい印象の材料になつてゐた手厳しさであつたのに。——彼は毬子がいま焦立つた、満ち足りない生活をしてゐるのだと考へた。話を途切らせて竝んだ二人の正面には、銀座の屋根の塊りのうしろに熱氣を帯びた海の雲が立ちのぼつてゐる。旅心の起るやうな高い、薄赤い雲だ。

「あすこに、今、出てゐるのですよ」

不意に毬子から話しかけられて、彼は一瞬間、その雲か何かの話だと勘違ひした。しかし毬子は、高架線にごく近い町家の上に大きく装置してある邦樂座の電氣廣告を指してゐた。

「どこを見ていらつしやるの。Aさんの興行にいま出てゐるんですよ」

「え？ 嘘でせう」

と修吉は打ち消した。なぜならばその月の邦樂座の興行といふのは、毬子の特色とは全く反対な味ひの齷物だつたのだ。

「いゝえそれがほんと。——ほんの端役なんです。御新造さん姿になるんですよ、わたしが。——あんまり身體を動かさないで濟む役に廻して貰つてゐるんです。身體のなほつた後の事を考へて、辛抱してゐますの。兄に仕込まれた時分の勉強を思へば何でもありませんわ」降りるべき驛

に近づくにつれて、毬子は手周りのものを纏めながら、いつの間にか今しがたの皮肉を次第に捨てゝゐた。「ほんとに、いつか樂屋に来て下さいませんか。市外に引つ込んで、おまけに病氣をしたもので、友達らしい人がすっかりなくなつたんですよ」

修吉は有樂町驛で別れた。藥瓶を下げて、毬子は人氣や情事などはもう無關係になつた女のやうに、夕日で蒸暑い邦樂座への横町に曲つて行つた。しかも修吉の觀た彼女の初演のをりの劇場は、その邦樂座の敷地に震災前まで建つてゐた有樂座なのである。

修吉はしかし、衰へた新造姿の毬子には興味がなかつた。今更端役に出てゐる彼女を見るに忍びない心持もあつた。それに第一暑くて——九十度に近い夜の屢々續いたその月一杯、たうとう出不精のまゝに過してしまつた。

二

毬子がロスアンゼルスにゐると云つた義兄の晴彦は、學生時代に修吉の家に寄食してゐた男であつた。新聞記者として自由民權を唱へた仲間で、修吉の父と晴彦の父とが互ひに面識のある關係だつた。W大學の文科に通つて、晴彦は面長の、頭髮の硬い、黒眼の恐ろしく大きい、兎も角

も印象の強い風貌を持つてゐた。器用な男で油繪を描き、素人芝居の幹事であり、文科の競走選手に選ばれ、そのうへ、庭球部といふものをそもそもW大學に創つたひとりだつた。つまり大學生としては人の目につき易い、派手な質の青年に違ひなかつた。

晴彦は學校で覺えて來たテニスコートの作り方を、修吉の家の裏の空地にも應用しようとした。春になれば雑草のなかにつく、しの混る空地であつた。晴彦はその草の上に白い線を按配した。

「この方が英國式で洒落れてゐるんだ」と晴彦は説明した。彼は其處で修吉の姉の喜世子や、従姉の松江に球の打ち方を教へはじめた。が、修吉はまだ小學生で仲間に入れて貰へなかつた。

そのうちに、テニスを覺えたいといふ喜世子の友達が學校の歸りにこの空地に集るようになって。晴彦は女學生に取り卷かれながら汗を流し、硬い頭髮を逆立たせ、大きい黒眼を動かし、東北訛むき出しの氣合をかけた。時には彼は轉んで遠い球を受けた。かういふ様子の晴彦は袴を長く履いた明治の女學生達に或る恐怖を與へたに相違ない。事實女學生達はみな晴彦を「こわい人」だと云つてゐた。が、さうは云ひながらも、結局噂の中心は晴彦その人であつた。要するに晴彦は得意だつた。

そのなかで國井さんといふ名の學生だけが、かういふ晴彦に臆しなかつた。國井さんは五尺五

寸もあるといふ體格で、唐時代の埴輪人形のやうに落ち着いた娘だつた。美しいといふよりも立派といふ言葉が當てはまるのだ。聲のいゝ、しつかり者ではあるが、心持の細かさを失はない。

——國井さんはいつも落ち着いて、この凄味のないでもない、一本調子な晴彦を笑ひながら傍觀してゐた。一種姉らしい魅力を具へてゐたから、喜世子も松江も云ひ合せたやうに、絶えず國井さんの傍に付き纏つた。やがて、二人の間には競争が起つた。二人はそはそはしたり當惑したりした。

可笑しな事だが、修吉もまた國井さんに付き纏つて歩く一人であつた。姉は彼には活潑過ぎたし、従姉は無口過ぎた。修吉もまた國井さんの來るのを待ち兼ねた。國井さんの周りをぐるぐるまはつた。國井さんはよく笑つて云つた。「わたしぢやあお友達には少し大き過ぎますね。こんなにつぼでせう。だから今度いつか、修吉さんより少し小さい妹を連れて來ませうね。まだ行儀がわるくて、今のところ駄目ですけれど」——

國井さんを中心にして、無口な松江は到底活潑な喜世子の敵ではなかつた。喜世子は遠慮なく國井さんを奪つた。國井さんと同じ組になつてテニスを楽しんだ。草の上で友達に揶揄はれた。揶揄はれて笑ひながら云ひ返した。そして一番動作の緩い松江は、勝負の平均を保つために晴彦と

組ませられた。修吉は細面の顔を赤らめてばかりゐる従姉に同情した。國井さんに關した事柄ならば彼にもよく察しがついたのである。

そこで、晴彦がテニスに勝つには餘程働かなければ追いつかなくなつた。熱情家の晴彦は相變らず頭髪を振り亂し、氣合をかけて馳けまはつた。息を切つて松江を叱りながら、松江を庇つてゐた。ところが、テニス仲間の驚いたのは、松江のしほらしい忠實さだつた。絶體服従の様子だつた。柄にない熱心さだつた。松江は國井さんと組むわけに行かなかつた。その押し隠してゐた感情の吐け口をこんな所に現はして行つた。……

三

どういふ徑路を経たものか修吉は知らなかつた。しかし翌年のひと夏過ぎた夕方だつた。戦捷の祝ひで東京ぢうに提灯行列のある夕方であつた。しきりに往來がざわめいてゐた。その提灯行列を見に行くのだと云つて、例のテニス仲間が縁先きに塊つてゐた。残暑が漂つてゐたのであらう、少し離れて蚊やり火に近く腰かけた國井さんの前に、晴彦が立ちふさがつてゐた。聲を押へながら晴彦は懊惱し、憤慨して喋つた。座敷の電燈を眞面に受けた晴彦の赤黄ろい顔を、修吉は

無氣味なものに感じて小さくなつてゐた。が、國井さんは平常のやうに落ち着いて、言葉少なく晴彦を宥めてゐた。誰か仲間のひとりが國井さんを「顧問だ」と云つて——少くもそれに似た言葉で揶揄つた。しかし燈に脊中を向けてゐる國井さんの表情は、修吉には分らなかつた。

「あの人は本當は冷たいんだ！」

と晴彦が罵るやうに、何人か第三者のことを訴へてゐた。すると國井さんが短く、穩やかに答へるのだ。

「いや、僕はさうは思へない。それあ表面の事だ！」

もともと表情の多い晴彦は首を振り、居たゝまれないやうに、もう暗くなつてゐる庭土の上をうろついた。兎も角も二人は修吉の傍で符徴の多い言葉を使つてゐた。しかし尋常でない晴彦の昂奮を何事かと訝つて、修吉は長い間柱の横で聞き耳を立てた。

半年ほど経つた。不意に晴彦は繪の製作の都合があると云つて、近所の寺の離れに移つてしまつた。その頃晴彦は大學に興味を失つて、既に美術學校に轉校してゐた。この不意の轉校のために、彼は郷里の家ともまづい關係に陥つた。しかし、晴彦が寺に移つてからも、修吉だけは始終遊びに出かけて行つた。急に晴彦のゐなくなつたのを、修吉は人懐こく淋しがつたのだ。修吉は

晴彦の机で水彩畫を描いた。

或る夕方だつた。薄暗くて寒いのに晴彦は燈をつけず、火を入れなかつた。郷國から金が來なくなつたのだと修吉に云ひ聞かせた。毎朝牛乳を配達してゐるのだとも教へた。寺の離れはすゝけて濕つぽく、修吉は退屈だつた。彼は歸らうと思つた。と、突然障子の外で女の聲がした。修吉はどきりと胸を打たれた。そして修吉の直感のとほりに、入つて來たのは國井さんであつた。學校の歸りなのだらう、國井さんは紫いろの袴をはいてゐた。その紫の袴が部屋一ぱいを明るくした。修吉は急に快活になつた。さう云へば國井さんは修吉の家に殆んど來なくなつてゐたからであつた。——國井さんは修吉を認めても、やはり落ち着いて笑ひながらその相手になつた。

さうだ、いつもの國井さんだ、と修吉はしみじみ考へた。なぜならば、國井さんが晴彦の寺に來たりするのは、決して普通の習慣ではないのだ、かう漠然と感じてゐたから。……

二三十分して修吉は國井さんと往來に出た。長い坂を一つ登つた。その坂の上から修吉の家が樹に取り巻かれて見えてゐた。と、「もうお歸りなさい」かう國井さんが穩やかに云つた。その時に修吉は、立派な國井さんがもう決して彼の家には來ないのだと何故か直感した。そして彼は感動した。

一種の最眞から、彼は家に歸つても、寺で國井さんに出會つた事は誰にも云はなかつた。

幾月か過ぎた。不意に修吉の家では母や姉がひそひそと國井さんの噂をするようになった。餘人が近づく^{ちか}とすぐに止めるのだ。しかしそれはぢきに知れ渡つた。——國井さんが晴彦と同じ家に住んでゐる。そのうへ國井さんは晴彦と一所に、新らしく出來たT博士の俳優養成所に通ひはじめてゐる、といふのである。……

二人が同じ家に住んでゐる。——修吉には一向不思議ではなかつた。彼は思ひ當つた。が、俳優と聞くと修吉は目を見張つた。なるほど舞臺に立つ、顔を異様に塗り立て、異様なあかりを浴びて大きな聲を出す——それは熱情家たる晴彦の特徴にはいかにも似合つてゐた。しかし悠つたりした大柄な國井さんの何處にそのやうな情熱が潜んでゐたのであらう！國井さんは日本で最初の新劇女優になるのだ。落ち着いて、笑つて、友達からいつも一目置かれてゐた人が。——たゞ一點だけ、あの唐時代の埴輪人形のやうに表情の大まかな人は、以前から何となく思ひ切つた事をしさうな娘には見えてゐた。

間もなく國井さんの母親が伊東の家に來た。未亡人らしい、質素な身なりをした、眼の大きい婦人であつた。國井さんの母親は度び度び足を運んだ。そして結局、修吉の兩親が媒人に立つて、

晴彦と國井さんとは結婚した。

事件はこれでひと先づ圓滿に解決した筈だつた。しかしそれ以來、國井さん——もう國井さんではなく白川の奥さんであつたが——に對する伊東の家のすべての人間の態度は一變した。勿論國井さんも自然足遠くはなつてゐたが、それでも以前寄食してゐた者の細君として、年始とか盆とかには必らず挨拶に来るのだ。しばしば國井さんは長い間客間に待たされて、ぼんやり庭を眺めてゐた。嘗てテニス仲間を中心になつてゐた同じ客間であつた。それでも、國井さんは努めてへり下つてゐた。國井さんはいつとも晴彦のとほりに裏口から上つてゐた。あまりひどい、と修吉は氣を揉んだ。——これも以前の國井さんならば、却つて内輪な、親しい間柄のあらはれに見えたであらう。だから修吉の堪へられなかつたのは、眼に見えた國井さんのさういふ控、目な態度ではなく、家のなかに存在してゐる眼に冷たい空氣に違ひなかつた。

一三年過ぎた。或る日修吉は演藝雜誌の新劇俳優列傳といふやうな讀み物のなかに、すでに何度かの公演によつて評判であつた白川晴彦同じく奈美子の名を見つけた。奈美子とは云ふまでもなく國井さんの舞臺名であつた。——しかし讀んで行つて、修吉は頁を見据ゑた。従姉の名が引き合ひに出てゐるのだ。晴彦と松江とが嘗て戀に陥ちたといふのである。雜草の上のテニスが仲

立ちをした、演劇に對する晴彦の熱情が松江を惹きつけた、それを晴彦の貧困のために松江が心變りしたといふのだ。晴彦は松江の親友であつた國井さんに打ち明けて相談した、そして相談されてゐるうちに國井さんは同情して、心が動いて行つた。——かういふ大體の経緯なのだ。

云ふまでもなく、それは演劇記者が面白く書き立てた、安つばい文章ではあつた。が、伊東の家のお趣など、なかなか描寫の焦點が合つてゐるのだ。修吉は酔つた勢でいゝ氣持に身上話を喋り立てる晴彦をありありと想像した。晴彦の誇張趣味、感傷趣味を想像した。しかしそれにも係らず、彼はやはり或る直感からその記事が決して事實無根ではないと思つた。彼は急に従姉に對して嗅覺をはたらかせた。松江が一時伊東の家から遠のいてゐた事、松江が姉よりもずつと早く話がきまつて結婚した事——何か影がある。何か匂がある。

しかし修吉の一番思ひ當つたのはその點ではなかつた。誰が戀を得て誰が叛いたか、どうして雜誌一冊で遽かに判断出來よう。彼の思ひ當つたのは伊東の家のすべての家族の採つた、謂はゞ防衛的攻撃の態度であつた。晴彦と國井さんとの出來事をいゝ機にして、従姉の方の痕跡をうまく打ち消してしまはうとした心理であつた。「これが真相だつたのだ」「晴彦はかういふ人間なのだ」といふ風な戰術であつた。——修吉が白川の一家に對して一種弱者の位置に立つたのは、こ

の時からだつた。

この前後に國井さんは初めて母になつた。それを修吉が覚えてゐるのは、國井さんが滿一年になつたといふ男の子を抱いて來たからである。相變らず他の客が居合はせてゐるからといふ理由で、修吉ひとりが接伴に出た。しかし國井さんも修吉ひとりに會ふのを、寧ろ喜んでゐる様子だつた。國井さんはどこか面癩れして、その赤ん坊も決していゝ色澤ではなかつた。長らく逢はずにゐると話が途切れがちで、修吉はその赤ん坊を物珍らしく弄つてゐた。國井さんの赤ん坊は修吉の手を取ると、すぐに口を寄せて噛みにかゝるのだ。と、國井さんはいかにもそれを可笑しがつて、いちいち聲を立てゝ笑つてゐた。修吉は國井さんの變つたのに驚いた。以前の國井さんは一寸した事で大聲に笑ふ人ではなかつたのだから。……

四

有樂座の樂屋番は修吉を女優訪問常習と睨んで、不愛想きはまる應對をしたが、實際を云へば修吉はその夕方はじめて劇場の樂屋といふものに足を踏み入れたのだ。十年経つてゐた。足もとにある上草履さへ取つてくれない扱ひに驚きながら、彼は幾分の不安をもつて階段を登つて行つ

た。長細い窓から秋らしい薄明るみの落ちてゐる階段だつた。彼はその四月に、規則づくめな高等學校の寄宿舎を出たばかりであつた。

しかし階段を登りきつて、たちまち彼は開幕前特有の混雜に度膽をぬかれた態だつた。晴彦の主宰する朱面協會の「ヴェニス商人」の初日で、どの部屋に脱ぎ棄てたとも分らないスリツバアの散らばつてゐる廊下では衣裳屋、小道具、寫真屋、花輪屋、辨當屋の番頭や小僧が往來してゐるほかに、ヴェニス市民の上着だけを着て毛脛をあらはした俳優や、眉墨や頬紅を塗つた半裸體の女優が忙しく出入してゐるのだ。——戸口の素早く締まらないうちに近づいて、彼はその女優のひとりに思ひ切つて案内を頼んだ。

彼は扉のすぐ後ろに國井さんの、白川奈美子の聲を聞いた。一座の中心女優であると同時に庶務をまで切り廻してゐる奈美子は、不足がちな初日の手配に機嫌をわるくしてゐるらしかつた。

「え？ イトウさん？——誰だらう。——お入りなさいつて」——修吉の失望したほどに、奈美子は氣の向かない返答だつた。

しかし案内された修吉を認めるや否や、電燈の眞下で女主人公ポオシヤの着付けに取りかゝつてゐた奈美子は、紅で縁をとつた眼を大きく見開き、昔とはまったく違つた早口で騒ぎたてた。

「なんだ、修吉さんだわ！ 先生はどこにゐるんだらう。誰か濟まないけれど先生に、伊東さんの修吉さんが來ましたつて、さう云つて下さいな。まあお坐りなさい、修吉さん！」

「先生はお隣りですよ」

多分柄合がらあひから云つてポオシヤの侍女の役を受け持つらしい先刻の女優が、部屋の隅から奈美子に教へてゐた。

「今朝雇つた學生さんのかたちをつけていらつしやるんですよ」

事實耳をすますと、粗末な板壁をとほして晴彦の東北訛が聞きとれるのだ。

「それならばもう直きですよ、修吉さん。それよりかまあお敷きなさい。何年ぶりでせう！ きつと白川が珍客珍客つて驚きますよ」それから奈美子は、斜向うの鏡臺の前に坐つてゐる十八九の女優を顔で示しながら説明した。「妹は御存知でせう。やつぱり毬子の本名でね、今度から舞臺に出るんですよ」

見るからに快活な、圓顔のその女優は、奈美子が最初に聲をたてた瞬間から振り向いて、娘らしい好奇心をあらはしながら笑つてゐた。この部屋では彼女ひとりはまだ素顔であつた。修吉ははじめて宿題の國井さんの妹を見たわけだつた。昔の奈美子の口振りを土台にして、彼は何とな

しに氣むづかしい、瘠せてひねこびた少女を想像してゐたのだが、それどころか修吉のすぐ横で、血色に充ちた頬をくりくりと盛り上らせながら笑つてゐる毬子は、面長おもながな姉とは骨格を全然異にした、疲労なぞ知りさうにもない、悪戯氣の溢れた、健康な、若若しい小女優ではないか。

「おや始めてかしら、お宅に連れてあがつた事があつたと思ふけれど」

「それあ話だけよ。姉さん」と、これも姉とは種類の違ふ澄んだ癩高い聲で、少しの遠慮もなく毬子が口を出してゐた。「姉さんの嘘つきは今にはじまつた事ぢやないわ」

「人聞きのわるい。毬子はね、シヤイロツクの娘をやりますよ。どんなものですか。ジエシツカつてね。この芝居は無論御存知なんでせう」

「せいぜい下手なところを！ 厭になつちまふわ」

修吉は窓と鏡台と、二種類の明るいものゝ並んでゐる部屋を見廻した。彼は奈美子が舞台で使ふ手匣、羽根扇、腕輪、それから毬子が柱に掛けたところの女學生臭い銘仙羽織や、着物や、帯をわけもなく見廻した。其處にはたしかに芝居の社會らしい愛嬌が活躍してゐた。また久し振りの公演の初日らしい昂奮が存在してゐた。しかしそのほかに彼は、來る筈のない人間が來た、伊東の家族が來た、といふ感情の迸りを感じたのだ。女優らしい愛想のほかに人の好意に對する弱

さを感じたのである。――

時刻を見計つて、毬子が隣室の様子を見に行つた。ジエシツカに扮する毬子はまだ「出」には間があつたから。――と、隣室では臨時雇ひの稽古がもう終つて、修吉の入つて行つた時には晴彦が性急に顔をつくりながら、煙草の烟の立ち籠つたなかで、二三人の客を相手に氣焔を擧げてゐるところだつた。

「やあ修吉さん！ 有難いです」繪具のために一層すさまじいものに變つてゐる形相を大きく動かして、晴彦はさも懐しげに聲を出した。彼はせつせと刷毛を使つてゐる最中で、ともすると言葉が途切れるのだ。「こんなガラガラな芝居を――いや、恐縮です。――御沙汰ですつかり氣が挫けてゐるところでしたが――家内もまつたく喜ぶです」

來客が一度に笑ひ出した。また晴彦の口癖が出た、といふ風な哄笑だつた。

「いや冗談でなく――この悪友共は、わたしが家内を引き合ひに出すとすぐに茶化すです。修吉さん、今日は観客席へ行つちやいけませんよ！ 樂屋でゆつくりしていらつしやい。芝居は舞臺裏から観るです。表からは明日でも明後日でも改めて観ると、それでいゝでせう！」

「いやな兄さん！ すつかりいゝ機嫌になつて」毬子が眉を寄せてビール瓶の列を見ながら、し

かし相變らず笑つてゐた。「本當に修吉さんは樂屋に残るの。ぢやあ御飯はどうするの」

「さうだ、洋食辨當を十ばかり！」歡待の心もちが十分に現はせないで焦る、といふ風だつた。

「財布はこゝにあるよ。それ十兩」

ダケツトといふのはシャイロツクの台辭に出て來る中世ヴェニスダケツトの貨幣の單位なのだ。

「はい、ダケツト！」

毬子は義兄の訛を上手に眞似て、それから誰よりも先きに、自分から聲高く甘えるやうに笑ひ出した。

扉が開いて、縮れた頭髮を無雜作に伸ばした、額の大きい、眼のぎろりと動く、風采からして一見藝術家とわかる、豪放な物腰の紳士が、太い煙管パイプを銜へて入つて來た。

「やあ先生、一別以來ですな。一昨日はあれからどうしました」又もや威勢よく聲をかけて置いて、晴彦は修吉の耳に囁いた。「そら、有名な悪魔主義作家のGさんですよ。名前は知つてるでせう」

何々派とか何々主義とか區別する事の好きな晴彦は早速そのやうな註釋を加へてゐた。しかしG氏は空いた椅子を手元に引き寄せながら、露西亞人には露西亞語で、と云つた調子で晴彦の口

癖をその儘真似ながら話しかけた。

「どうです、白川氏。印税は来たですか」

「怪しからんです。やつと昨日の、それも晩になつてからです。本屋のやつ、シヤイロツクよりも性が悪い」

「あつはつはつは、しかし君の處女作は評判がいゝぜ」

「それがつまらんです。——修吉さん、わたしの「毒酒」といふ自叙傳小説の出たのを知つてますか。一本を獻じますから読んで下さい」晴彦は如才なく諸方に話題を振り向けた。「それがGさん。一向つまらんです。白川にしちや上手すぎる、あれはGが全編に手を入れたのだらうといふ噂ださうです。いや光榮ですな」

「つまらん」が急に「光榮」になつたりする邊り、いかにも調子で物を云つてゐる面目が丸出しなのだが、其處にまた一寸した人の善さが現はれて、聽いてゐる修吉は悪い氣持ではなかつた。

「それあ氣の毒だな。序文なんぞあげなければよかつたな」

「どうしまして。友達甲斐に我慢するです。處女作でさへあなたに嫌疑がかゝる以上は、もう作者の前途恐るべしです。まつたく、有島武郎何のそのです」

「はつはつはつは。まだあの軍歌を歌つてゐるのか。はつはつはつは」

「それがね、一昨晚はあなたに褒められたといふので、すつかり昂奮を感じたです。悪友共と有島武郎何のその、を唱つては飲み、飲んで唱ひして氣がつくと、たうとう夜が白白とあけてゐたです。そこで家に戻つて一萬部賣り盡した夢を見た、なぞといふのは嘘ですがね！」

五

合圖があつて、修吉は強慾な猶太人になり濟ました晴彦の後から階段を降りて行つた。不用な書き割りに仕切られた、まるで場末の路次のやうに暗い、汚い、疵だらけな舞臺裏の床をあちこち往き來して「出」を待ちながら、晴彦は二人きりになると、急にしんみりした態度に變らうとしてゐた。

「まつたくのところ先手を打たれましたなあ。修吉さんが来てくれるとは思はなかつたです」

シヤイロツクの下僕とジエシツカとの會話の進行してゐる舞台へ遠慮して、晴彦は不似合に聲をひそめるのだ。

「一體何年になりますかね。——修吉さんがわたしと同じ背丈けになるのですからな。——小母

さんも年をとられたでせうな」

「白髪が生まれましたよ」

「さうでせう。——さうでせう。——忘恩の謗そしりを免れませんな。——招待券を御送りするのが本當なのでせうが、つい、その、テレちやつて」

「なぜ」

「なぜつて、女には迷ふし、どうも、御承知のとほりの變かて、こな生活ですからな。修吉さんもわたしの芝居ははじめてとせう」

薄い白衣に着替へて、猶太の娘に装つた毬子がこつそり近寄つて來た。こつそり——と修吉が感じたのは、舞台裏では足音をたて、はいけないといふ云ひつけを、彼女が不馴なれな女優らしく細心に守つてゐたからだつた。

「驚いた。修吉さんは兄さんの芝居、はじめてなの」

「いゝや、これでもファウストを見ましたよ」

「やあ、あの下らないファウストを見て下さつたですか」

「見て、なぜ樂屋へ寄らなかつたの」

「あの帝劇の樂屋にですか。その勇氣はありませんでしたね」

「ファウストたつた一度なの。心細いのね」

「修吉さん、こいつは末つ子の、小猫のやうなやつですからな。遠慮なく遣り返しておやりなさい！ わたしは稽古の時に打つてやるです」

「ファウストと。それからすつと前のノラを見ましたね。——でも朱面座は一體旅行が多いんでせう。さうぢやありませんか」

「それが修吉さん、日本ではまだ新しい芝居の觀劇階級といふものが出來てゐないですな。芝居道の臺所は話にならんです。自然と金に追はれて田舎廻りが多いです。惡辣あつに構へないこの社會では到底生存がむつかしいです」

薄明りと濕氣と臭氣とに包まれて、晴彦はともすると先刻の慷慨的口調に戻つてゐた。

「わたしなんぞ現に借り倒しで生きてゐるです。算盤の合はない土地は夜逃げをやつたです。

奈美子もどうして、千軍萬馬の士ですよ。毒氣を持つてゐないと毒にやられる社會でね。——そんな生活だから、お宅には、どうも」——山師、策士、漁色家、デカダン、さまざまな肩書を世間から貰つてゐる晴彦はおほきやう大業に頭を搔かいて見せた。昔からどうかすると晴彦は、一寸氣の弱い、

一寸正直なところを曝露する傾があつた。尤も本人は平常それを隠して、大いに偽悪家振つてゐるのだが。——「しかしこれでもまだ脈はあるです。實はこの間うち例の自叙傳小説を書いてゐましてね、昔のお宅をいろいろと念頭に浮べたら、非常に懐しかつたです。いや、非常に懐しかつたです」

「自叙傳に家が出て来るんですか。それあ早速讀まう」

「いや、お宅はほんの僅かですよ」

「僅かでも、是非讀みたいな。讀みたい譯があるんだから」

「譯？——そりやどんな譯ですな」

「どんなつて、簡單には云へないけれども」

修吉は先刻よりはずつと氣安さを取り戻してゐた。すると、晴彦は柄になく釣り込まれて眼を丸くしながら狼狽へた。

「分つたわ。修吉さんなかなか人が悪いのね」

「うん、なかなか人が悪い。さつきは二階で猫をかぶつてゐましたな！」

晴彦が下手から舞台に出ると同時に、毬子は修吉を誘つて上手の袖の陰にまはつた。其處はシャイロツクの家内部にあたるのだ。梯子と薄べつたい板とで二階の出來てゐる有様は普請場そつくりだつた。しかし開放したその二階の窓からは、月あかりになぞらへた青白い電氣が射し込んでをり、更に、三等觀覽席にぎつしり詰つた觀客の顔の塊りが一種の盛り上つた量をつくつて、遠くにぼうつと見えてゐた。

「それあいけなくつてよ」と毬子が笑ひながら修吉を制した。「向うからもあなたのお額が見えるぢやないの」

すぐ一二間先きに晴彦の台辭が、開放してあるシャイロツクの窓を透して、といふよりは、むしろ壁のあやしげな布目を透して聞えてゐた。修吉はこの不整頓きはまる、便所の臭ひさへ通つて來る區域のひと重外が、いま相當に美しく爽やかに出来あがつてゐるのを實感した。修吉はそこで、先刻晴彦がG氏に向つて喋り立てゝゐた議論——いや、それは晴彦の説ではなく誰か歐羅巴の劇評家の意見らしいが——その議論を想ひ出してゐた。——「この芝居の主人公は、それあシャイロツクでもポオシヤでもありませんな。ヴェニス町の町人氣質、つまりヴェニス全體の移り變りが主人公だといふのです。賛成ですな。また、それでないとシャイロツクの孤獨がど

うも馬鹿らしくなるです」………

そしていま、ヴェニスの街の辻辻のなかに小さく溶け込んだほんの一生物として、脊中の曲つたシャイロツクの臺辭を聞きとつてゐると、修吉にもそれは馬鹿らしくなかつた。芝居らしい空気にそゝられて、修吉はまつたくその街の大きい移り變りが、この芝居の主人公であるかのやうな幻想を抱いた。修言はまた過勞で移り變つてしまつた晴彦の聲にも、ふと奇妙な、回顧的な愛情を感じた。といふのは、彼は昔の張り切つた晴彦の聲を憶ひ浮べてゐたのである。

「どうお」と鬢かづらの下げ髪を近づけて、毬子が彼に尋ねた。「芝居の舞臺裏は」

「思つたよりずつと面白い」

「思つたより？ まあ威張つてゐるのね」

しかし、修吉はそれよりも別の事に氣を奪はれてゐた。

「——晴彦さんの聲も老けましたね」

「だつて何年會はないと思ふの。ちつとも觀に來なかつた罰よ」

「さうかも知れません」

「これからはせつせと來ておやりなさいな」

「えゝ來ませう」

「少しはお世辭もあるけれど、兄さんは舊式なのよ、ほんとに喜んでるのよ」

「さうですか」

「でも、なぜ今まで修吉さんが來なかつたか——少し分つてるわ」

「どんな風にです」

暗いので、修吉には毬子の表情がよく見えなかつた。しかし毬子は狡こづい笑顔を向けてゐるらしい。

「あら分らないの。——分つてる癖に」

「ぢやあ云つて御覽なさい」

「上手いのね。だつて兄さんの本がどうのつて、さつき云つてたぢやないの。——でもね、兄さんはあんな事云つて、きつとあなたに本をあげなくつてよ。相當あなたの家の事を書いてゐるんですもの」

「どんな風に」

「それあ、兄さんの書いてる事は少しヨタよ。——ヨタだらうと思ふの。それにしてもあなたの

家の方は——あんまりよくはないわ」

「さうかも知れませんが。——確かにさうです」

「あらそんなに真面目にならなくつてもいゝわ」

「真面目にはならないけれども——なつても可笑しくしないでせう」

「知らないわ。——無暗に恩だの何だのつて恐縮してるから、兄さんが何だかお人善しに見える来るわ」

「本當です」

「また！ あなたは感心しちやつちやいけないのよ、なんて、生意氣でせう。——こんなに話し込んぢやいけないのよ。後にしませうね。そろそろ戸口に立つてゐなくちや」

事實晴彦の黄昏時らしい獨り言には、ジエツカの名がしきりに混つてゐた。「ジエツカ、もう大食ひは出来んぞ。こりやジエツカ、寢坊をしたり着物に縫裂きをつくつたりはもう出来んぞ」——晴彦はそれを樂屋での氣焔と同じ口調で怒鳴り散らしてゐるのだ。そして窓枠にあたる電光のやうにありありと、修吉がそれを覺えてゐるわけは、毬子がもう一度鬘をつけるやうにして、彼に冗談を云つたからである。

「兄さんたら、わたしのほんとの事を云つてるわ」

毬子は戸を開けて登場した。ごく短い、容易い臺辭だつた。その短かさ、容易さがまた彼には可憐に響かない事もなかつた。——毬子はすぐに引つ込んで來た。

「今度は二階にのぼつて、見おろして、窓をしめるのよ。忙しいでせう」

粗末な梯子がぐらついた。修吉は急いでそれを押へた。と、危い足どりで登りながら毬子は云ひ譯のやうにぶつぶつ、呟いた。「いゝのよ。いゝのよ。ほんとに仕様がな。押へて貰ふ人間を昨日頼んで置いたのに——」

毬子が上にゐる間に、しかし、ボヘミアンネクタイを結んだ、瘦せた、顔いろのわるい青年が靴音を用心して覗きに來た。強いて落ち着きを見せながら、舞臺裏の見學でもするやうな態度ではあつたが、明らかに修吉を何者だらうと觀察してゐるのだ。そこで修吉は梯子に腰かけながら、自分がいまその男の眼に甘い人間としか映らないのを、はじめて自覺した。

「いゝえ、あの人は『お嬢さんさよなら』と云つたきりなの」

頭のうへで、毬子が往來のシャイロツクに答へてゐた。修吉は若葉の匂を想像した。髮の匂を想像した。毬子はまたシャイロツクに向つて、神妙に暗記した臺辭を披露してゐた。少し甘つた

るく、生地を出して。

「さやうなら。——思つたとほりに事が運ばば、わたしはお父さんを失くしてしまふし、お父さんは娘を失くしてしまふのだわ」

六

たしかに修吉はその晩、毬子といふ間接の古い知り合ひに漠然と惹かれてゐた。が、彼をそれほど惹きつけたものが毬子個人の魅力だけだと云ひ切つては、どうも不十分であつた。毬子の云つたやうに誇張と愛想とがあるにせよ、彼の訪ねて行つた心情を白川夫婦が揃つて感づいてくれた、受け取つてくれた、それが修吉には有り難かつたのである。彼は樂屋ですつかり寛いだ。すつかり腰を落ち着けた。そしてかういふ豫想外の氣安さが、彼にとつてはその晩全般の印象の背景になつたのだ。肖像畫のバックのやうに。——そればかりではない。白川の一家族が自宅で退屈してゐたのではなくて、劇場の樂屋で、謂はゞ火事場のやうな出入りのなかで、忙はしく、殺風景に、騒騒しく應對してゐた事もその原因の一つになつてゐた。なぜといふに、もともと特徴のあるその連中の一つ一つの言葉や身振りがまるで光線にでもあてられたやうに、修吉には一

層強まつて見えたのである。強まつて聞えたのである。

翌晩も修吉は劇場に出かけて行つた。久し振りの東京での公演といふ條件が當つて、芝居はその晩も満員に近い入りだつた。演出家として決して周到でも緻密でもないが、晴彦の遣り口は博打をうつやうに機運第一主義で、それに萬事派手で太つ腹なのだ。

修吉の貰つた切符は、平場のすつと前の方だつた。苦勞のない世界そのものゝやうな組み立てのそのメロドラマのなかで、筋書どほりに奈美子から晴彦、晴彦から毬子といふ順序に登場した。しかし最前列に近くて、修吉は舞臺全體の動きや意圖を感じるかはりに、白川一家の低い咳ばらひや一寸した合圖、白粉のつき工合や額の汗ばんだ工合などを、それぞれ見分けてしまふのであつた。それで、修吉は前後左右の觀客に取り巻かれながら、自分だけは相變らず舞臺裏から眺めてゐるやうな幻覺を感じて行つた。これが毬子の特に「見よい場所」だと勿體をつけて選んでくれた席なのだ。正直に云つて、修吉はそこに甘つたるい謎をぼんやり想像した。

毬子はこの晩もシャイロツクの露臺から往來に向つて、つまり觀客に向つて獨り言をつぶやくと、音をたてゝその鎧戸を締めた。表から見れば古風な欄干と蔦とのある露臺であつた。すると一二分して——修吉はふと、舞臺の額縁がくまについてゐる小窓から毬子が客席を覗いてゐるのに氣が

ついた。元は番組の數字か何かを捜し入れたもので、今ではしかし使つてゐない八寸角ほどの小窓なのだ。毬子は修吉の氣づいたのを見てとると笑ひ出した。例の悪戯氣をあらはして。

次の幕でも毬子は小窓から覗いた。その次の幕でも……

長い幕間になつた。修吉の座席を横に廊下へ出ると、すぐ二三間先きに樂屋へ通するくゞり戸が閉つてゐた。彼はその廊下を往き來しながら、もう今しがたの甘つたるい氣持ではなかつた。可笑しなほど烈しい一本氣で、彼は毬子のあの生き生きした悪戯を眞面目にとつていゝものか、全體毬子といふ、活氣そのもののやうな娘を一時的にでなく好いて行けるものかどうか——を考へてゐた。——修吉は思つた。これ以上にいま近づいて行けば、きつと毬子を心から好きになるだらうと。同時に、恐らくぢきに不満になるだらうとも彼は豫想した。その不満になるであらう豫想が彼を苦めた。そんな風に彼は嚴格に考へてしまつたのである。……

不意にくゞり戸がふわりと開いた。まるで風にでも押されたやうな、軽い開き方だつた。透かして見て、修吉はその薄暗い闇うちに奈美子の長女の立つてゐるのを認めた。もう小學校に通つてゐるといふその娘は、前夜顔を覺えた修吉を見つけると、笑ひながら後ろを振り向いた。暗い後ろには誰かゐる様子なのだ。

明らかに陰にゐるその大人に教はつて、娘は修吉にあらためて會釋をした。しかし樂屋口の階段をのぼりつめた舞臺裏に立つてゐるのは——修吉の豫想とは違つて——階段のために一層脊の高く見える奈美子であつた。

「おや今日は表から？ 毎日御苦勞さんね」

頬紅を塗つて兩袖をたくしあげ、ストリンドベルヒの一幕劇に出る百姓娘の扮装をもう濟ませながら、奈美子は田舎靴で板を踏み鳴らしてゐた。しかし木綿の香りが、前の幕の富裕な後家姿よりは修吉にも親しめた。

「ゆうべは、あんな風にかげ違つて失禮しましたわ」

かけ違つたといふ譯は、「ヴェニスの商人」では奈美子と晴彦兄妹とが絶えず交代に舞臺に出る組み合せになつてゐて、それに修吉はと云へば、終ひまで兄妹と一所に動いてゐたからである。

「そのかはり、毬子からすつかり報告がありましたよ」

「どんな風に？」

天井で次の芝居に使ふ赤電燈の試験をしてゐるために、奈美子の表情はよく分らないのだ。その表情のよく分らない趣が、丁度前晚の梯子の脇の毬子を修吉に聯想させた。

「どんな風につて、それは悪事善事とり混ぜて、綿密に」

「善事悪事ですか」

「いゝえ、悪事にほんの少し善事をとり混ぜて——なぞと云つては失禮ね。あなたは毬子の取り巻きぢやないんですものね」

修吉は黙つて階段の中途にゐた。取り巻きといふ突然の言葉で、彼は前晩に舞臺裏で出會つた青年を思ひ出してゐた。

「でも毬子の無遠慮には驚いたでせう？ あれは修吉さん、跳ね上りよ」

修吉はやはり黙つてゐた。

「悪気もないし、擦れてもゐないのだけでも、あれは……やつぱり跳ね上りよ」

修吉は冷え冷えとした秋の霧のやうなものを、肩先から振りかけられた氣持になつた。彼はやはり黙つて、何故奈美子とそのやうに念を押すのか、それを考へてゐた。——と、舞臺に建ちかゝつてゐる客間のなかを、奈美子の母親が横切つて來た。その母親のあまり老けたのに修吉は前夜も驚いたのである。

「なんだお母さん、先きへ行つちまつたのかと思つて捜したのに——」大道具の職人達に愛想を

振り撒いてゐるその老人を振り返つて、奈美子は獨り言ともつかずに、「丁度いゝわ。修吉さんも一所に食堂へ行つてらつしやい」

「僕はもう濟んだんです」

彼は老人の降りて來た——毬子のゐる方角からの陽氣な物音を聞きとつてゐた。

「ぢやあ紅茶でもどう？——今日は合憎、樂屋は妙なお客で満員なのよ」

「妙なお客？」

「えゝ妙なお客」

「昨日よりもつと妙なお客ですか」

「えゝ昨日よりも妙なお客。——だからあなたはお止しなさい」

立つてゐる場所の高低のため、修吉はふと十年前の國井さんの姉らしい倅を感じた。しかしさう云はれて見るとその瞬間、彼は猶更樂屋の扉を一つ一つ開けて、どういふ色好みの相場師や銀行屋や文士が入り込んでゐるのか見渡してやりたくなつた。

「だからその飛ばつちりでわたしは此處へ、毬子はお風呂へ、老人子供は食堂へ、それぞれ御避難なのよ」奈美子は昔のとほりに落ち着いて、笑つて、紛らせた。偶には年寄りのお付き合ひも

しておやりない。年寄りのお相手ぐらゐが——一番無難なものよ——

驚くほど髪の毛の白くなつた奈美子の母親に別れて、修吉が劇場を出たのは十一時過ぎてゐた。舞臺の擬まねひものを見つめてゐた眼には急に淡い、しかし落ち着いた月あかりを浴びたわけである。彼はその老人の相手をしたがら一幕劇を見終ると、樂屋には寄らずにその儘外へ出たのだ。しかし、靄もやらしいものゝ低く降りてゐる路次を抜けながら、もともとこれでいゝのだと彼は思つた。古い知り合ひの人達、世話になつた事のある人達を訪ねて喜ばせたいし、自分も借りを返した心持になつてゐる、それでいゝのだと彼は思つた。ほかの事は元來豫期もしなかつた景物だつたのだと彼は思つた。

「あれはやつぱり跳ね上りよ——」

修吉は奈美子の批評を頭のなかで繰り返した。

「うちの妹は今が何事も面白い盛りで、思はず皆さんに戯れてしみます。眞まことに受けてはいけませんよ——」修吉はかういふ意味に奈美子の口振りを解釋した。よし、眞まことに受けるものか、彼は番組を破いてキラキラ光る溝に投げ込んだ。二晩續けて芝居を見たあとで、彼までがどことなしに

舞臺の人物の身ごなしの影響を受けてゐたのだ。

それは毬子が白川の家族でなかつたならば、たとひ修吉が情事に無経験であつたにしても——いや無経験であれば猶更、大膽に快活にこの一座の最年少女優に近づいて行つたかも知れなかつた。しかしうづり氣かどの廉かどでは、謂はゞ伊東の家は白川の家に對して負おひ目があるのだ。要するに修吉は知らず知らず、白川の家と伊東の家との妙な因縁に縛られてゐたのである。

七

縣立の中學校に勤めてゐる友達と、やはり土地で育つた細君とに引き留められて、修吉はするするにその川べりに洗濯場を持つた、鄙ぶびた家に滞在してゐた。その冬の流行感冒で寝込んで、修吉はもう十分に恢復した筈であつたが、さて新芽の出る季節の變り目になつて見ると、彼は病氣あげくらしい變な疲勞に氣がついた。そこで彼は東海道の三島驛から海邊へ抜け、沼津在のその友達の家に寄せて貰つたのだ。友達の家に彼はもう十日ほど泊つてゐた。體力から來る臆おそ劫せきも手傳つて、小ぢんまりした家の素朴な家風が萬事氣に入つた形であつた。

友達もこの土地の人間で、勤めの傍ら水産の方の調べものを續けてゐた。海に近いし、郷里の

家に歸つてゐれば物價が安くて、仕事の執着にも堪へられるといふ譯だつた。寂しいと云へば寂しい生活だ。だから偶に客人が泊り込むと、夫婦は揃つて離さなかつた。……

川の多い在で、細君は捕りたての泥鰌を手料理した。海邊の土地で、細君は雲を見て明日の天氣を噂した。要するに友達の家を素朴さはこの細君がこしらへてゐるのだ。或る朝修吉が一人ぼんやりしてゐると、細君は赤ん坊を抱きながら、隣家の樹に登つてゐる植木屋と垣越しに話をしてゐた。話工合から推して、細君の實家と同じ町から來てゐる植木屋らしい。——どこから見てもこの地方の風土に育つた若い細君であつた。

勤め人の友達に對しても、終日ただ爲す事もなく暮すのは氣がひけるので、修吉は毎日定まつた時間だけ本を讀んで頭の力をつける事と、定まつた距離だけ歩いて體力を恢復する事と、この二つを日課にした。すると、この二つとも病後の修吉には丁度精一杯の課目であつたと見えて、溝と云ふ方が當てはまるやうな川べりの、その家の單調さを厭ふ氣は少しも起らなかつた。それどころか、もう暫くは生活にこれ以上のものを附け加へたくないやうな横着な氣さへ起してゐた。……

と、或る日、かういふ土地でこのやうな身體の状態の時に、修吉は郵便屋から桃色の目立つ封筒を受け取つた。

實際彼の受け取つたハイカラな封筒は、この家の構へや人間とは釣り合ひのわるいものだつた。勿論不意打ちの好奇心もあつたが、修吉はむしろ質朴な細君に工合のわるい心持で、その女學校のノートじみた手紙を開いた。——毬子が新らしい劇團に入つたといふ知らせなのだ。方々に轉送されて大ぶん遅く受け取つた勘定になつてゐた。

「兄夫婦があつたやうに急に渡米しましたので、わたくしは一時途方にくれました」

と、毬子は妙にしほらしく訴へてゐた。白川夫婦は有樂座で興行した年の暮に、早く云へば經營に行き詰つて、例の向ふ見ずからカリフォルニアへ出かけてしまつたのである。

「私は甥や姪の世話をして、もう舞臺に立つ事はあきらめてゐました。それが思ひがけない幸運で、今度アメリカから歸朝なさつたT先生の世紀座に採用して戴きました。T先生の芝居ならばと母も許してくれました。そのうへ、來月早々の初演に私は身分不相應な役を許して戴きました。チエホフの「叔父ワーニヤ」のソーニヤなのでございます。今が烈しい稽古の最中で、私は朝晩の電車のなかでもソーニヤの臺辭ばかり繰り返して居ります。芝居の濟むまでは舞臺の外でもソーニヤと同じ娘になつてゐようと心がけて居ります。」

「それでも、私がこの一年の間母と心細く暮しに追はれてゐました事は、今になつて見ればソーニヤの役を勤める場合に、大變爲めになりました。私はあゝいふ娘の心持がよく分るようになりました。私は辛抱づよくなりました。」

「それは兄や姉のゐる間も、決して樂な暮しをした事は一度もございませんが、たとへば稽古の折に兄にステツキで打たれましたも、涙をこぼしながら烈しい稽古の自慢にするやうな心持が何處かにありました。本當にまだまだ苦勞知らずで、兄達がゐなくなつた後から考へれば極樂でございしました。あの頃にソーニヤの役を兄から貰ひましたも、私は表面のことしか呑み込めなかつたと思ひます。私はこの一年の間の母のためにも、ソーニヤで成功したいと願つて居ります。これでも姉が舞臺に立つた頃よりは、ずつと時勢が向いてゐるのだと母が申してくれます。」

「稽古は澁谷の松本といふ貸席で續けて居ります。大變勝手なお願ひでございますが、一度御覽においで下さいませんか。母も大ていの日は參つて居ります。きつと有樂座の時分とは違つた私を御覽下さる事と存じます。それから、これはなほ申し上げにくい事でございますが、劇團のために、どなたか芝居のお好きな方がおいででしたらば、是非お勸めおき下さいませ。プログラムと切符が刷れましたならば、いづれ又お送りいたします。けれどもそのために厚かましく

手紙をさし上げたのではありません。たゞ芝居を見ていたゞきたいのです。私一人の勝手になりましてもいけませんので、母からも願ひ致します。」

事實母親の手紙もそこに同封してあつた。これにも亦、時を得ない俳優の留守宅らしい心遣ひがあらはれてゐた。しかし詰まるどころ、修吉には何となく遠遠しい出來事のやうに響いた。質朴な人達を毎日見てゐる目には、その手紙のなかの都會くさい慾望や夢想だけが、殊更浮き出て感じられた。それに修吉には——謂はば火の塊りを抱へてゐるやうなその娘を、漠然と恐れる氣持もあつたのである。

夕方友達が歸つて來たのを機に、修吉は柿若葉の門口に降りたつてゐる細君に報告した。

「奥さん、今日の東京からの手紙は、あれは女優から來たんですよ」

「まあ！ 女優さんのものはどんな手紙を書きますの」

「どうも、都の風が急に吹いて來たものだ」友達も笑ひながら縁側に來た。「お客さん一人でかうも違ふのだから。——女優とはまたどうした事だ」

修吉は經緯を話した。それから手紙の内容も。細君の單純な知識慾が彼には氣に入つて。

「若いなあ、その娘さんは」

友達はまた繰り返した。

「ふうむ。これあひと旗擧げようと意氣込んでゐるね。潑刺たるものだ」

「ほんとに。氣を張りつめて。東京の人でなかつたら病氣になりますわね」

「あなた方もさう睨みましたか」

「睨んだとも。雖伏してゐて——まるで跳ねあがるのを待ち構へてゐるぢやないか。僕達が田舎にゐるので殊更に華華しく思ふのかも知れないが」

面白がつて、彼等はそれから遅くまで青葉の下で女優生活を話題にした。話題にしながら、しかし修吉は、毬子に返事を書くことは翌日もその翌日も不精してしまつた。それに彼は、毬子がぬかりなく兄の關係をたどつて大勢の人間に、それもちやんとした大勢の人間に後援を頼んでゐる事だらうと考へてゐた。一書生の彼に手紙を寄したのは古い縁故の、心持のうへの事なのだらうと思つた。それならばいづれ會つてゆつくり話せばいゝのだと、勝手な理窟をつけた。季節が美しくなるにつれて友達が毎日のやうに近郷を案内してくれるので、彼は簡単な斷りさへついで打ち捨てゝしまつた。そして彼が東京に歸つた時には、芝居はもう夙うに済んだ後であつた。……

八

半年あまりも放つて置いて、修吉は十二月に入つてからやつと白川の留守宅を訪ねた。それも十日ほど前の新聞の演藝欄で、留守宅が以前のとほり化粧品屋を開いてゐるといふ噂書きを讀んで思ひ出したのだ。白川奈美子考案の化粧水といふ賣出したつた。この小さな店は院線電車の或るガード裏の横町にあつた。繁華な驛のすぐ近くにあるとは思へない、ほんの半町ほどの長さの寂れた横町なのだ。

夜の九時を大ぶん過ぎて、修吉はその驛の階段を降りて行つた。近郊から歸るをりにはどうかすると市内電車への乗換場に使ふ驛であつた。寒くて、それに雲模様だつた。彼はふと、演藝欄の記事を思ひ出した。かういふ折に訪ねないとまた延び延びになると彼は思つた。雲が本物になつたら傘を借りようといふ腹もないではなかつた。しかし、さういふ必要でもなければ、夜遅く女世帯を訪ねる氣には到底なれなかつた。

その店は看板も飾窓も荒れて、まったくその裏町に似合つた有様だつた。——と、毬子は子猫を抱きながら、火鉢の傍で十二三の女の子を相手に話してゐた。ガラス障子を透して往來から分

るのだ。修吉はしかし、その店の暖くなさうなのに一寸失望した。冬の晩なぞには、硝子一枚を隔てた家のなかには別世界に見えるものだが、この店は一向にそんな氣を起させない。

修吉は音をたて、内に入った。が、毬子はまったく見忘れたといふ風で、訝しげに彼を視返してゐた。

「しばらくでした」

手持不沙汰に立つた儘、修吉は其處へ寄つたのを後悔するやうな氣になつた。

「失禮ですがどなたでしたらう」

襟卷に深く口を埋めてはゐたが、あまりに艶のない返事であつた。修吉は益々後悔しながら名乗つた。

「あゝ伊東さん。——さうでしたね。しばらく。——まあお掛けなさい」

やはり、そんな人間もゐたかといふ淡泊な口振りだつた。

「うちの猫がこの人の臺所に上り込んでね、いま歸つて來たところなんですよ」そして修吉にはもう構はずに、その女の子との話を續けてゐた。「古ものだけでも、これとこれ上げませうね。さう汚れてはゐない事よ」

引き出しからリボンを選んで、毬子は猫を連れて來たらしいその女の子に持たせた。女の子が出て行つた後もまだ子猫に話しかけるのだ。

「もう他所へ行くんぢやないよ。行くんぢやないよ」

すぐ二階から奈美子の長男の低い音讀が聞えてゐた。修吉はその男の子でも降りて來てくれなものかと考へた。少くとも彼は、あの手紙に應しい内輪關係で應對されるものと豫期して來たのだから。

「しつ。しつ。——わたしたちはね、猫一匹飼ふにも近所の人によくして置かないといけないんですよ。陰でいぢめられたりしては可哀想ですからね。——あなた方にはそんな事お分りにならないでせうね、門の附いた家に住んでらしつちや」

修吉は不意に、半端な時に謝まつた。

「チエホフの芝居の時にはまったく失禮しました」

「チエホフの芝居の時にまったく？ どうなさつたの」

そのとぼけた口振りを何處まで眞面に受取つていゝものか分らなかつたが、修吉は兎も角も沼津の在ざいに出かけてゐた話をひと通り聞かせた。毬子は皮肉な笑顏を見せながら黙つてゐた。と、

高飛車に遮つて云ふのだ。

「まあ人つて分らないものね！ほんとに分らないものだわ」

「どう分らないのです」

「譯を聞いて見なければ分らないものね、つて云ふのよ」
やはり皮肉な響が消されなかつた。

「東京にゐない斷りだけでもあげればよかつたんですが——」

「さうよ。さうですとも。わたしの書いた事が冗談のやうにでも讀めたんですか！」

「本當のところを云へば——僕なんぞが働かなくつたつて、大勢崇拜者がゐると思つたんです」

「合憎ね、わたしは昔から堅人よ」

「堅人でないとは云ひません」

「母や姉に無暗と監督されて、いやでも應でも堅人だわ！」

修吉は有樂座の分別臭い奈美子を想ひ出した。

「黙つてゐて、どうせ本氣にはしないのでせう。ちつとも困らないわ」

「いゝや。さう思ふ種たねがないでもないんです」

「種があれば猶更ぢやないの。母も怒つてゐたわ、あの時。母にだつて、あなたは失禮だつたわ」
「さうでした」と、その通りなので、修吉はやはり受け身に甘んじてゐた。「お母さんはいまお家ですか」

「花子とふたり、風邪氣で二階に寝てゐるわ。——苦勞してゐる時つてものは、兎角ひがむものよ。あなたの方でひがませないようにしなけりやいけないわ。さうでせう？」

「不精しました」

「不精だけぢやないわ」

「……………」

「あなたの家の遣り口はみんな同じね。あなただけはそれに氣がついてゐるのかと思つたら——
やつぱり同じだわ」

「それあ云ひ過ぎるでせう」

「まあどうして？」

上は手に出て、毬子は大きく愕いて見せた。修吉はむつとしてその表情を視つめ返した。が、修吉にはやはり説明は出来なかつた。——毬子の魅力を警戒したのだと云へば、それは一種の告

白になつてしまふではないか。

「本當に、さう思つてゐるんですか」

「えゝ思つてゐますとも。なぜ？」

「それならそれもいゝでせう」

天井の低い、火の氣のない店先きで、二人とも少時むつとりと黙つた。——二人が黙ると、二階の疊を歩く足音が殊更にすぐ頭の上で響くのである。

「あれは貞一さんかしら」

修吉は仰向いて獨り言のやうに云ひ紛らせた。音讀をいつの間にか止めてゐる奈美子の長男を仲間に入れたうへで、いゝ加減に引き上げようと思つたのだ。「——貞一さんなら久し振りに會ひたいな」

「學校の宿題を始末したら降りて來るでせうよ」毬子は怒つてゐながら、子供を其處へ呼ぶ氣は左程なかつた。「お祖母さんの許しが出ると思つて遊びに降りて來ますよ。——あなたはまだ獨り？」

修吉は不意の質問に、呆氣にとられた。

「獨りでないやうに見えますか」

「いまに子供を持つて御覽なさい、大變なものよ、毎日毎日。わたしなんぞもう芝居は出來ないわー」

「どうしたんです。そんなに苛苛して」

「もうぢきまる二年、二人預つてゐるんですからね。兄がカリフォルニヤでうまい仕事にぶつかるまで、なんて夢みたいな話ですわ。子供がうるさくつて云ふんぢやないわ。いまに毎日子供の世話をして御覽なさい、責任を持つて。わたしの氣持が分りますよ。尤も、あなた方はどうせ女中つてもものを使ふのでせうからね」

硝子障子を軋らせて、芝居者らしい酔つた男が入つて來た。毬子の前で道化た役目を甘んじて引き受けながら、その男は身振り澤山に面白可笑しい話をはじめた。修吉は黙つて、同じ裸體美人をあらはした店ぢうの化粧品の商標をぼんやり眺めてゐた。つまり、毬子がさういふ男をどんな風にあしらふか觀察してゐたのだ。毬子はしかし、容赦なく云ひ返したり聞き流したりしてゐた。この男のやうに根氣よく女優の「お付き」にはなれない。お合憎だ、と修吉は魅力のないでもない毬子の我儘振りに、或る反感を起してゐた。

しばらくしてその男が便所を借りて奥へ立つた時に、修吉は尋ねた。

「あれはどういふ人ですか」

すると毬子は同じ芝居者、同じ種族を庇ふやうに、急に敏感に撥ね返して來た。

「あの人がどういふ人？ だらしないだけでいゝ人よ！」

酔つた男が店先きに戻つて、又ひとしきり上機嫌に喋りはじめた間に、修吉は毬子にろくに挨拶もせず外へ出た。汽車の通るガードをくゞつて電車に乗つた。——その儘、彼は彼でやがて職業を持つた。そして生活を持つた。……………

九

最近、あの白い輪の揺れてゐる電車のなかで話しあつて以來、修吉はまた偶然にも毬子に出會つた。まだ冬のはじめの淋しさが淋しさとして感じられないで、久し振りに快いといふ時期だつた。修吉は娘の風邪薬の瓶を下げて新宿驛のプラットフォームへのぼつたのだ。毬子は其處でひとり電車を待つてゐた。ガード裏の留守宅で夙うに母親を失くした毬子であつた。毬子は修吉を見ると愛想よく立ち上つた。「しばらく」と云つて。——

「遠くから、さうだらうと思ひました。夏よりは大ぶん見かけがいゝやうですね」

「えゝ、この頃になるといつも肥りますわ。でも扁桃腺がなかなか癒らなくつて」

勢よく立ち上つて來たわりに話が續かない。毬子はしかし夏の頃よりは落ち着いて、絶えず所謂年増らしい微笑を見せてゐた。成程聲が暖れてゐる。夏痩せの或る妖氣をも失つて平凡に肥つてゐた。もう美しくないその人に、隔てなく古馴染の話が出来るのだ。

「おや、どなたかおわるいの」

「子供です。風邪が長くつて困ります」修吉は瓶を見せて札をカタカタ云はせた。「子供を持つて見ると分る事があるつて、先に叱られた事があつたけれども、この通りです」

「そんな事を云ひましたか？ わたしが？」毬子は顔を赤らめて「つまらない事をいちいち覚えてらつしやるのね、お轉變時分の話を」

そして毬子はひとりで繰り返し笑つてゐた。——修吉の方の電車が入つて來た。

「この頃は、芝居の方はどうです」

「おや、お乗りになりませんの」修吉がすぐに別れるものと考へてゐたらしい毬子は、彼の顔いろを見てとると、それから一層夏とは違つた落ち着きを見せた。「芝居ですか？ えゝ、あれつきり。——これからだつていつ出られるか分りませんわ」

感傷的な話を避けて、修吉はそれを扁桃腺の所爲にわざと解つた。

「それあ上手な醫者に切つて貰つたらいゝかも知れない——」

「いゝえ身體のためばかりぢやないんです。女優としちや、わたしはこなせる役柄が狭いんです。自分でよく知つてますわ」

さういふ事の話し相手に飢えてゐるかのやうに、あまりしみじみと云ひ出されたゝめに、修吉はどう返事をしたものか當惑した。

「それあ過渡期なんでせう。一時的の事でせう」

「つまり子役の聲變りですか？」

穂子は少しばかり笑つて見せた。

「えゝ。何て云ふか、娘の役が柄に合つてゐた人にはみんな一度、さういふ時が来るものでせう」

「一寸老けた時にね？——ところが一番大事な時にすつかり芝居を休んでしまつたのだから、あつさりしたものですわ」

「さう思ふだけ、きつとあなたが複雑になつたんでせう——」

「それがお合憎ですわ！ もう自分の弱身を一切合財、これで承知なんですから！」やはり調子に乗つて自身を嘲ける物言ひであつた。「あんまり一本調子で、わたしのやうなのは少しでも老けたら、もう動きがとれないのですわ。よく兄に云はれた事だから、ちやんと分つてゐるんです」修吉はひどく寂しくなつた。中途半端では別れにくゝなつた。もう一步踏み込んで慰めて行きたくなつた。と、穂子は昔の面目を發揮した、いかにも穂子らしい勝氣を云ふのだつた。

「ほんとに、どんな役でも見ん事演りこなしてやらうと思つてゐた時分から考へると、もう世の中が馬鹿らしくなつてしまひましたわ！」

「そりや無理だ。ひとりでも何もかも出来るものぢやない」

「……………」

「ひとりで出来る役柄の繩張りがおほよそ極まつてしまふから、そこでいろいろの役者が大事になるわけぢやありませんか」

「それはさうですけど」

「僕のやつてゐるつまらない仕事を引き合ひに出しませうか。僕だつて思案しぬいたあげく、ひとりびとりの役割が——つまりひとりびとりの力ですがね——結局極まつたものだと思つたら、

急に肩がおりたんですよ」

「まあ、老けたやうな事を仰有るのね」

「僕がですか。大違ひです！ さう思つたらすつかり若返りましたよ。ほんとです」

「さう若い、若いって自慢なさらなくてもいゝわ」まだ活氣を失つてゐない證據には、毬子はすぐさま手厳しく云ひ返した。「それは、男の三十は女の二十ですもの！」

毬子が人を待つてゐるのだと分つて、彼等はまだ其處でしばらく立ち話をしてゐた。構内のレールの列は秋の頃のレールの列よりも徒らに擴がつて見えた。——毬子の現に考へつめてゐる事柄は修吉のその頃考へつめてゐた事柄と、まさしく打つかつたのだ。二人は同じやうな焦慮を持つてゐたのだ。人生に對する焦慮をであつた。が、電氣揭示が動いて、何臺目かの山ノ手線電車が入つて來た。その乗り換へ客のなかゝら五十を越した婦人が、毬子を見つけて近寄つて來た。

——毬子のたゞ笑つてゐて紹介しない様子が、どうも姑しよとよのやうに修吉には思はれた。が、紹介をされないために、修吉は何となく話題を途切らせて、やがて反對側の電車に乗つた時も、毬子がいま話相手を切に求めてゐると判つてゐながら、家へ招くひと通りの挨拶をさへ云ひそびれてしまつた。

「では又」 「では又——」

もう毬子に魅力のないのを見抜いて安堵した筈であつたのに。

十

郷里へ行く用事が出來て、修吉は下關行の列車に乗つた。修吉は新聞を擴げた。丸ノ内を背景にして洗濯屋が干し物をはじめてゐた。そのやうな屋根とすれすれに、まだゆつくり急行車が走つてゐたのである。——修吉は五六種類の朝刊を買ひ込んだ。と、演藝に縁の深い新聞の隅で、彼はまつたく不意に毬子の病死したのを知つた。

元朱面座女優であつて有名な白川晴彦の義妹だといふ、ほんの五六行のそれは記事に過ぎなかつた。まつたく女優は半年も舞臺に立たないと香りを失ふのだ。あの無理に勢よく出してゐた嗚れ聲は、實は喉頭痛のためだつた。……

その記事にはまた葬式のある寺の番地が出てゐた。それも修吉の家から直徑にして、ごく近い寺らしかつた。

長旅をする汽車はまだ下町の家並から離れてはゐなかつた。修吉は東京にゐるやうな、ゐない

やうな變な状態であつた。そこで修吉の最初に考へた事は、弔問しなければならぬといふことだつた。しかし次にはもう、毬子の良人の名も知らない事だし、それに汽車から降りた矢先きに聞いたわけではなく、汽車に乗つた後で知つたのだから——といふ風な曖昧な心持に返つてゐた。ひと口に云へば面倒くさい氣持である。

陽があたつて来て、久し振りに修吉は田舎の冬枯の景色を眺めた。彼は勝氣な毬子がもう音無しい、といふやうな事を考へてゐた。毬子があの後、個人の小さい事、しかし小さい個人が次次に限りなく生誕して續く事、そこからして新らしい快活さを獲たかどうか、さうあればよかつたが、と考へゐた。そのうちに修吉は、いつも彼の顔を見れば高飛車に出る、そして彼の道義心を遠慮なく突つく、その本人のもうこれで居なくなつた安樂さ——それに近い心持を何となくぼんやり、日向ひたなのなかで感じてゐるのに氣がついた。氣がつくと——流星に彼は驚いた。白川一家には最後まで我儘をきめてゐたのだと思つた。

修吉は人間を應揚にするために、過度な自己穿鑿は避ける工夫をしてはゐたが、この時には流石に考へてしまつた。考へて行つて、毬子との付き合いはいつも要所要所で不精の連続だつたと今更に述べた。その不精はどうかといふと——やはり毬子がチエホフの芝居のあとで皮肉を云つたやうに、不健康のための不精のほか、遠慮のための不精のほか、自分の屋根を心配せず持つてゐる人間の不精、といふところが何處かにあるのだ。

修吉は死者に對して平靜を失つた。毬子だけの問題ではなくて、これは修吉自身の生活態度の問題であつた。この根性は修吉の父にはなかつた筈だつた。修吉の父は苦學して、民權論を新聞の社説に書いて、少しづつ少しづつ地位を得て、そして息子に所謂高等教育をほどこしたのだ。威勢よく新鮮に流れてゐた水が平地に来て淀みはじめた形ではないか！ 注射をしないと墮落してしまふ。……

修吉は襯衣を振るやうに自分をふるつた。

籠こもつたぬくもりを追ひ出すやうに自分に空氣を入れた。

郷里で修吉は五日目にやつと中心地の市に歸つて、床屋に行つて、電車に乗つた。町はずれの公園へ出かけて、彼は放し飼の鶴でも眺めながら半日ゆつくりしようと思つた。五日打ちとほしの用事をひと先づ終へたのである。すると、彈むやうにして走つてゐる空身かみみの電車のなかで、思ひがけなく両側の白い輪のついた釣革がひどく揺れてゐた。——修吉はと云へば電車に乗つて、

電車のとほりに動いて、たしかに生きてゐるのだ。生きてゐるからには停滞せずに生きようと思つて、自分を少しづつでも掃除して、自分に一本、痛い注射をした。……

(昭和三年六月作)

聖ピノチエツト

紙の裏に鉛筆で書きなぐつた詩だ。

「その逆立ちする支那人は
空が青いつて覗くのぢやない
ほんの五厘錢をもうけようとして
けふの習慣にちよつぶり！
さからつて見たまでだ」

ひどく伸びて來た鶏頭を分けるやうにして、啓は大兒だいじの部屋の窓に載つてゐるその紙きれを手
に取つて見た。大兒は起きしなに出掛けたのだらう。まだ濡れてゐる齒楊子をその紙の上に載せ
て、陽ひにあてゝゐた。まつたくその日は晴れた。暑い。

安息日たる日曜だからカトリック教會に出掛けたな、と啓は思つた。しかし朝の色硝子のほと

りで聖母の前に跪く男の作りさうにもないこの詩は、實は大兒に打つてつけの獨白なのだ。——啓は少しばかり發見をした心地で何度も読み直した。

第一に、書き方からして「けふの習慣にちよつぱり」逆らつてゐる。原稿紙の表たるべきところには、樂書き風に支那服を着た大道藝人の逆立ちを幾つとなく描きながつてあつて、欄外の餘白にこれは又、翻譯の心覺えらしい文章が縦、横、逆さを嫌はず細かく記してある。よく見ると、なにがしのカトリック敎史の一節なのだ。横濱のカトリック敎會から分擔して下受けさせられたといふ翻譯に違ひない。そして肝心の——樂書きの繪の因をなすところの詩は紙の裏に汚ならしく書きちらしてあるといふ始末だ。齒楊子にわづかに押へられて、原稿紙は鷄頭のそばで風にヒラヒラ揺れてゐた。

風に揺れ朝日にあたつて、その窓際の「逆立ち」の詩は上面は快活だ。しかし後口が何となく寂しい。そして大兒は——一體さういふ男のだと啓は思つてゐる。

二

よく混らない混合酒のやうに、二種類のまつたく違つた血を身體につめて、大兒は大人になつ

た今でも往來で暮してゐる。大兒は啓と十違ひの二十一だ。大兒の家は代代上州の桑畑を離れずに来たが、親爺さんはしかし淺草に育つて生粹の頭梁になつてゐる。大兒の顔いろは穀物の匂がしさうに黒い。大兒の眼は野鼠のやうに小さくて慄悍だ。が、大兒は山の手の錢湯と食ひ物とを頭から笑つてかゝり、ドビュツシイの名前を掲示板で見つければ公園の音樂堂へ詰めかける。——相棒の加賀見が云ひふらした話だが、一度日割を読みちがへてワグナーに打つかつた事がある。と、あまりの野暮さに我慢がしきれなくなつて、「いやだ、いやだ」と云ひながら大兒は耳に指を突込んだといふ。啓はしかしそれを聞いて、大兒の感覺ならば芝居ではあるまいと思つた。三年前にかういふ大兒が啓の前に現はれた。同じ淺草公園生れの青年——乙骨、加賀見と三人で訪ねて來たのである。乙骨のあまりひどい勞働をやつてゐる話を文通の上で告げたあげく、三人組の他の二人の仲立ちで乙骨が啓の家にしばらく寄食する事になつた、その打ち合はせに揃つて訪ねて來たのだ。その時に年長の加賀見が大兒を指してこんな風に紹介した。——「この男の異國趣味も病膏盲に入つてゐますよ。」

「嘘です。嘘です」

「どうせ判る事ぢやないか。かうなんです。いつぞや「カルメン」の活動のかゝつた時にね、觀

覽席で隣り合はせになつたといふ地理學者——どうも普通席の地理學者では大した事もなさうですが——その地理學者から西班牙といふ國柄、ひいてはピレネエ山脈やバスク族などの説明を聞いてじつとしては居られずに紹介狀を貰つたんです。西班牙語の教師への紹介狀です。それから、早速その晩出掛けて行つて、小遣の狀態をまあ話して、一番安い教授料でもつて、さう、半年ばかり初歩の文法書を目茶苦茶に勉強したでせうか。そのうちに僕が佛蘭西語をはじめると、僕のやつてゐる發音がまた馬鹿に羨ましくなつて、今度は佛蘭西語に熱中したものです。今ぢや佛蘭西語のほかに羅典語にも首を突込んでゐますけれど。——こいつ、そんな事にばかりお金をせびつて、おまけに詩を囓るといふので親爺からは愛想つかしです。君——取つて置きのやつといふのをせよ」

公園の青年らしく頭を搔いて、大兒が啓にはじめて誇示したところの散文詩には次のやうな題がついてゐた。「誰か人形でないだらうか？」

三

「誰か人形でないだらうか？」

榊 大兒作。

「ピッコロの雜る音樂——例へばラジオレットや子供のブリキのラツパが——朝の十時に玩具箱の歌を僕の二階の窓まで聞えて來るのです。折から街並木の葉裏をゆする風につて。

僕はこんな音樂家が大へん好きなのです。そこで讀みかけのプチイ・ジュルナルを置いて、窓をガラガラ開けた。けれど、それはモンソウ公園でやつてゐるらしく、見えませんでした。

僕は帽子をとつて出て行つた。
すると——どうして急に、そこへこんな芝居小屋が出來たのでせう。椎の木の下に人形芝居でした。

音樂はそこから聞えて來たのです。アメチヨコをしゃぶつた子供達はハタハタ揺れる小屋の幕のあくのを待つてゐた。

——アナトオル・フランスも云つてゐる通り、リオンの人達は笑はずに見て居られぬと云ふが、全く、たゞに！ ギニョオルが棒を持つて出て來れば子供達は大喜びになるのです、無性に。

僕も子供達と一所に見てゐた。ハト豆を盗み喰ひしたギヨニオルが鳩の番人に追ひかけられる滑稽です。バカバカしいが嬉しい限りです。——すると、玩具のラツパを吹く男が不意に云つた。絶えず吹き鳴らす玩具箱の歌をやめて、この男はギニョオルよりも鼻の低い妙な男です。

「僕は人形の精神しか持つちやゐませんよ」

するとフラジオレットを吹くコーヒ色の男が云つた、絶えず吹き鳴らす玩具箱の歌をやめて。

「僕は人形の精神しか持つちやゐませんよ」

すると、又、ピツコロを持つた男も云つたのです。

「僕は人形の精神しか持つちやゐませんよ」

——そうして、音楽はそのやうに止んで、何故かと云ふのに楽器はほんの三つであつたからです。人形芝居はそれでおしまひです。子供達はサークル廻しや竹馬乗りに、てんでに行つてしまつた。

日曜の朝、ほんの少し見た、こんなギニョオルに僕は感心してしまつたのです。そこで僕は人形芝居の作者——臺本の作者にならうと思つた。けれど、僕は才能が大へん少ないと云ふ事に気がついたので。そこでいつそ僕は人形芝居の社會へ藝名ピノチエツト・ピノチアノと名乗つて、人形になつてしまはうと考へたのです。

が、どうした事か、人形になるには僕はどうやつて成つたら宜いかといふ秘訣が解らなかつた。僕は又しても考へたのです。——けれど人形になる術はなかつた。親愛なる秘密の友達——小

悪魔のリユタン君でさへも僕をしてアヤツリ人形とはなし得ないでせう！

然るにしても僕は——何もピノチエツト・ピノチアノと名乗つてアヤツリ人形とならずとも、しばしば僕は誰かのアヤツリ人形ではなかつたか？

椎の木の下の本ベンチに六月の日をさけて、僕は考へ込んでゐたのです。

終。」

町つ子の朝の歌のやうに朗らかなところがあるが、しかし、又朝の窓硝子のやうに歌ひ手の息でとかく曇り易い。——生活に一つの方向を持ちたくつて、その方向の絲に動かされる人形には喜んでならうと思つてゐるが、何故かその志は通らない。そして屢々自分が誰かしらの分裂したアヤツリ人形であつた事に氣がつく。人の居なくなつた日向の本ベンチで。——

散文詩のこの後口の味はひに啓はふと親しみを持つた。その親しみが、最初ちよつと術學の悪傾向の芽をかぎつけた彼の嗅覺を紛らせてくれた。兎も角もこれは人間の小さい事を嘆いてゐる口上だ。が、ブリキのラツパに助けられて、それが明日往來のうへでどういふ風に聲を大きくして行くか？……

そこで公園の三人組。——乙骨は啓の家に住み込むし、大兒と加賀見とは月に一二度づつ遊び

に來るようになった。

啓への親しみを現はさうとして、大兒は最初のもてなしの晩飯を腹十二分に食べて愉快になると、活動の悪漢やチャップリンの眞似を演じて見せた。驚くべきほどよく出來た人形だ！が、座の者があんまりいつまでも笑ひ崩れる中であつて、大兒は食卓の端で氣のせいにか少しばかり情氣てゐた。こゝでも又——大兒は快活だが後口が何となく寂しい。

四

並木通りの四つ角から交通整理標を越して、その本屋は向ひ側正面に見えるのだ。

本屋は二階建の南向きだ。往來に近い書物の半分と店員の半分とが日を浴びてゐた。日ざしに暖まつて、さう辛い事もなく大兒は働いてゐるかなと、啓は思つた。十日ほど忙しい事のあつた後で、啓は久し振りといふ氣持でその電車を横切つたのである。

大兒をその本屋に紹介したのは啓だ。大兒の親爺さん——淺草の頭梁が中風で倒れたので、大兒はもう今までのやうに佛蘭西語の學校に通つて詩をつくつてばかりは居られなくなつた。が、至るところで小市民級の大兒は職を斷られた。そこで、啓が今度は知り合ひの本屋へ出掛けて行

つた。啓の頼み方は多少強請的なものだつた。——やつと土産物をポケットに入れて持ち歸つたといふ形で、啓はあまり水氣のたつぷりとはなさうなそのパンを大兒の前に差し出した。——朝九時から晩十時まで勤。住み込み、食事付、月二十五圓。これではどうかね。大兒は食慾のやうに單純にそれを受け取つた。

いま、店員たる大兒は高い本棚の前に、ぼんやり立ち番してゐた。ふと啓を見つけると大兒は頭を無意味に掻きながら駈け寄つて來た。汚れてはゐるが黒い脊廣に赤ネクタイをつけて、どうも無帽主義を實行してゐるお客としか見えない。一體店員といふのは大兒のやうに、口笛でも吹かんばかりの顔をして反り返つてはゐない。

「どうだい。——君のその後の技量は？」
就職の話がきまへて以來、啓ははじめて様子を見に來たわけなのだ。

「いけませんよ」と大兒も啓の調子に合わせて滑稽に云つてゐた。「何しろこの通りぎつしり竝んだ本に、いちいち違ふ値段がついてやがる。五月蠅いつちやない」

「それぢやあ、アメリカの均一店へ轉任するんだね。——今日はひとつ、君の店員振りを見て行かう」

「いけませんよ、慘酷だなあ」

どうせ求職難の絶頂にあつて、なるべく面白い話だけを選ぼうといふ風に、二人は氣輕に笑つた。

と、合憎客の一人が近づいて大兒に岩波文庫を渡した。大兒は啓の前で、自負心から少しばかり赤くなつた。

「えゝと。——ポツチが二つだからと、四十錢です」

出納器のベルを鳴らして、大兒は詩人らしい髪を撫で上げながら釣り銭を持つて來た。そしてもう一度微かに赤くなつた。

「ありがたう。——」

その時だつた。二人のすぐ横で十八九の美しい女店員が別の客に釣り銭を渡しながら、いかにもよく徹つた聲で、適度の快活さを籠めて云つてゐた。

「ありがたうございました！」

「なるほど。うまいものだ！」

啓は昨日まで氣のつかなかつたこの明るい接待法に感服した。

「ほんとです。かう眼の前で見事にやられちや悲觀しますよ。」

女店員たちは笑つてゐた。外國の書物を扱ふ必要から、この店の女店員はみな相當の教養を持つてゐた。労働のために肉が引きしまり、血色がよく、身輕であつて化粧法と生活戦術とを心得てゐる。要するにその娘達は、求職の舞臺では明らかに優者であつた。——啓は、何日も髪を櫛らずにゐる眼の前の大兒を見た。きのふの自尊心を荷物にして「ありがたう」もはつきり云へない、失職つゞきの大兒を見た。と、變ないぢらしさ——變な友情を啓は不意に感じた。

店先きではしかし立ち話も出来ないの、大兒は啓を停留場まで送るといふ口實をつくつて外へ出た。今度は啓が改まつて尋ねた。

「冗談はぬきにして、ほんとに工合はどうだい」

「足が棒になつちまふ。——それに入口は吹きさらしでせう。まあ寒中に行かないでよかつたと思つた」

實際行人は既にひと息ついたやうに着物を軽くしてゐた。もう五日で三月だ。

「何しろ朝五時に起されて、晩がどうしても十一時でせう。勉強の暇なんぞありませんよ。第一おやぢの奴、寢床を僕に疊ませるんだからあきれちまふ。馬鹿な奴！ はゝゝゝゝ」

豫想外に不満なのだ、と啓は思った。そして啓は軽く失望した。啓の捜し得た、これが唯一の職であつたから。――

「せめて十時間ぐらゐの勤めだ」と大兒は年上の啓に頼つてまだ不平を云ひ續けた。「少しづつでも夜なべに翻譯ぐらゐ出来るのだけれども、あれぢやあんまり舊式ですよ。つまりあれあ紺暖簾式なんだな」

しかし、事實のうへで他に口のない以上は、大兒はもう少し腰を据ゑてもいゝのだと啓は思った。大兒の家は今それどころでない。大兒は是非とも定収入を手掴みにする必要がある。大兒の妹は女中奉公に出てゐる。――乗るべき停留場を啓はそのまゝ通り過ぎながら、大兒に一寸忠告がましい事を言はうかと考へた。が、今しがた店の内で感じた變ないぢらしさ――變な友情が却つてそれを阻んだ。

「それで、公休日はないのかしら」

有める心持から啓は至極曖昧なことを尋ねて見た。「公休日があれば、翻譯の仕事はその時に少しづつ溜めるのだね。清書は加賀見に頼んであげてもいゝよ」

「ありがたい。公休日――なんて、さあ、あやしいですよ。この間も日曜の朝だけ暇をくれつて

云つて議論をした位だから。」

「日曜の朝を、どうするの」

「まだ話さなかつたかしらん。――僕は近頃教會へ行つてゐるんです。カトリックの」

啓は鋪道の上で思はず大兒を振り向いた。彼の妹も現にさうだが、啓はこれまで幾人かのカトリック信者を知つてゐた。が、大兒とカトリック。大兒と鳩と白百合と祈禱。――啓は眼を丸くした。

「それあどうした譯だ。暇をつくる――口實かね？」

「やあ、手厳しいな」大兒は顔を赤らめ、例もの癖で頭を搔いて見せた。「ほんと云ふと、教會で羅典語を今教はつてゐるんです。羅典語を本式に教へて貰へるだけでも有難いと思つて――」

「ぢやあ語學のための入門か」

「どうも手厳しい。――語學の問題ばかりでもない心意こころなんだけれど」大兒はしかし何故か言葉を濁してゐた。「それよりかこの間教會でえらい事をしまつたんですよ。そら、アナトオル・フランスの「天使の反逆」ね。あれを友達から借りて見つかつちまつたんです。持つて行つたのが悪かつたな。何しろ題が「天使の反逆」でせう。神父の爺さん、チエツ、チエツつて唾を吐くんで

す。あやうく嚴罰さ。はゝゝゝゝゝゝ」

結局なぜ教會へ通ふかの説明にはならなかつたが、二人は露あまはな幹のあたゝまつてゐる、並木通を突き當りまで歩いて笑ひ續けた。並木の盡きるところにガードがある。啓はそれをくゞつて家に歸るのだ。

五

半月たつと早春だつた。窓の外に最初の青草を見ながら、啓と加賀見とは並んで分析のし競べをつゞけてゐた。——二人の分析試験室といふのはしかし、疾走してゐる省線電車だ。そして分析されてゐる題目はまさしく大兒だつた。

「榊君がほんとに彌撒みさをうたふのかね。それから十字を切つて懺悔をする。——分らないなあ」
「僕にもどうも動機が分らないのです」

と加賀見が云つた。加賀見は三人のうちでは一番温厚といふ方で、その爲に時をり大兒や乙骨から平凡人に取り扱はれる。

「大體、初めのうちはこんな事を噂話のやうに云つてゐましたつけ。——誰から様子を聞いたも

のか知らないけれども、大兒は例の調子で急に移民になつて見なくなつたんですよ」

「ありさうな事だ！」

一瞬間、啓は友達の雲のやうな自由を羨んだ。その自由が實は友達の手にもないものであつたが。

「さうです。ありさうな事です。大兒はアルゼンチンかブラジルに出掛けて、血洗ひぐらゐから段段市民になる野心を思ひついたんです。ヴェノスアイレスやリオデジャネロは世界で指折りといふ都會ださうですからね。その歸化權の話ぐらゐ聞かされたのでせう。ところが、南米に渡るにはカトリック教徒になつてゐると大變いゝ——」

「そりや素的な博突だ」

「いや、それが妙なのです。この頃ぢやあ南米の話はまづ打ち切つてゐるんです。それどころか教會でなかなか神妙らしいのです。しきりに羅典語を勉強する。神父に「善い學徒」だつて云はれたさうですよ。要するにあれあ好學の士に違ひないんですね。——ところが神父にさうやつて好かれると、又トテツもない空想がひとつ出來上つちまつたのです。つまり、うんと勉強して、あつちのセミナリオに留學させて貰ひたいらしい。佛蘭西のでも伊太利のでも。——聖サ何とか院の

學僧ですわね」

「そのための今暫くの辛抱つて事になるのかい。——どうも「赤と黒」の主人公になつて來たね」

「まあそんなところかも知れない」

「セミナリオはいゝけれども、セミナリオに着くが早いか巴里の苦學生町さして逃走、なぞといふ事は起らないのかね」

「あはゝゝ。——大兒が聞いたら憤るだらうけれども——しかし實際、大兒の事は僕には分らない」

「分らないつて、君は竹馬の友ぢやないか。——榊君に遠慮して曖昧に云つてゐるね？」

「さうぢやないんです」と控へ目な加賀見が云ひにくさうに辯解した。「本當を云ふと、大兒は僕たちに本音を吐かないのです。——だから或る程度以上の「仲間」を決して作らない。僕はまあ一番古い友達といふ立場ですけれど——大兒は始終新しい友達をこしらへちやあ、當座は何でもその友達でなくつちやならないやうな風に往き來するのです。それが、又しばらく経つと、きつと互ひに氣不味い事が起つたり、倦きが來たりして遠のくといふ風なんです。——大兒の昔か

らの友達はみんなその點で時時氣の滅入るやうな經驗をするのです。——大兒は——あの缺點を直すといゝな。——惡口のやうになつて僕も氣持がわるいけれども」

二人は黙つた。二人は齊しく大兒といふ人間を考へてゐた。と啓が突然笑ひ出して感嘆した。「遠いもの、珍奇なものゝためには、近くにゐるもの、顔を見倦きたものゝ全てを賭けるといふサイコロだよ。それあ——このサイコロにはしかし魔力の精彩があるな。——兎に角あの男はどう轉んでも、孫を兩脇に置いて晩飯を食つたりしない事は確かだね」

屋根續きの向ふに、別の方角へ走つてゐる高架線が防波堤のやうにくつきり浮いて、ひと筋に小さく見えてゐた。此方の高架線とすべて同じ構造である筈なのに、遠近法の標本とも云ふべきその線は一帶に薄日を浴びていかにも美しく、そして情緒を帯びてゐた。啓はそれを見つめてゐた。啓は大兒の眼を眼にしてゐた。……

六

バスク人の使ふ、そして佛蘭西の庭球選手ポトラの使ふ黒い大黒帽子を斜にかぶつて、大兒は生垣の道の新芽のふりかゝるなかを、風呂敷包みを持つて來た。大兒の引越のそれが全部だ。

「やあ、のうのうした。此處は静かだな。まつたくいゝ時候だな」

旅から歸つて來た男といふ様子で縁側に足を投げ出すと、大兒は物珍らしく啓の庭を見廻した。「この花床はなどこはこれから僕にいちらして下さいね。園藝をやつてる友達に要領を聞いて來よう」啓の豫感がやはり當つた。大兒は本屋で我慢がしきれなくなつた。たうとう啓が引張り出されて、大兒の附添人といふ格で本屋へ斷りに行つた。それから二十何日分の月給おわりの分割をポツケツトに入れた大兒と、啓はその本屋の前の舗道で別れたのだ。

すると、二日ほど経つて大兒は珍しく語學校の方の友達を伴れて來た。——大兒の切り出せずにあるところを、その新らしい友達が代つて喋つた。つまり本屋の口をやめて見たものの職がないので、當分啓の家に住まはせて貰ひたいといふ話だ。なぜと云へば前の食客たる乙骨はその頃辭書編纂家の校正助手といふ仕事を見つけて、啓の家から其方へ引き移つてゐたから。——

啓は正直に云つて食客との半端な關係に倦んでゐた。啓は乙骨の生活を保證した。語學の教養を保證した。乙骨はその代り用を手傳はうといふ。また隨分手傳つてくれた。しかし何年といふ間一つ家うちにゐて、絶えず相手の詩人氣質を尊重して暮す關係の勞はしさには、或る忍耐力が要るようになる。



乙骨がゐなくなつて、啓はたしかに氣が樂になつた。乙骨は悪い男ではないが關係のわるさから來る。

いま、大兒から同じ事を頼まれた時も、啓はすぐにその危懼を感じた。しかし畢竟それは啓自身みづかの勞はしさだつた。啓は、生活の不安のために不斷よりも少しばかり悄氣せうきてゐる大兒と對ひあつてゐた。そして——啓は引き受けた。

と、子供らしいほど明るい貌つきに變つて、大兒は新芽に壓倒されてゐる縁先で啓を相手に饒舌べんべんりたてた。

「僕はこれでわりと用をしますよ。——乙骨はいゝ奴だけれど、あゝムツツリして居ちやあ家の内が面白くないや。——あゝあ。交通巡査みたいに立つてばかり居たもので、足が變になつちまつた。疲れがとれたら最後、うんと勉強しよう——例の、見つけて下さつた翻譯の口ですがね。あれもどしどし仕上げちまひますよ」

まつたく、美しい季節のなかでもう立ち番の必要もない。時間に制限なく翻譯の仕事の出来る目くろみめくろみが先づ成り立つて、大兒はページエントのピラでも撒くやうに罪のない饒舌をふり撒いてゐた。その舞まひ上る宣言によつて、啓は大兒のいま幸福なことを認識した。——この人の同居

を無論躊躇なく承知すべきだつたと彼は思つた。それに翻譯の條件は非常にいい。大書肆から出るそれは浪漫派作品叢書といふやうなものであつて、百枚の仕事で三百圓も入る。しかも監輯者は恒藤辰夫——大兒が日本で一番愛してゐる作家その人だつた。要するに大兒は齡の割にして大金を貰ふうへに、一度逢ひたいと思つてゐた人物と始終折衝する事になる。

自分のものになつた三疊の部屋に、大兒は机を置いた。インクを置いた。アンリ・ルツソの無邪氣きはまる色刷繪を壁に貼つた。例の日曜日の朝日にさらされてゐた「逆立ち」の詩はこの三疊の窓に載つてゐたのである。……………

七

土用に近づいて啓の家の縁側は暗くなつて行つた。手入れをしない枝が蟲をひそめて擴がり、コスモスは雜草とまざつて伸び放題の始末だつたから。——この草には、まれたやうに啓は家に閉ぢ籠り出した。籠居をべつに好みはしないが、熱中する性分の啓は忙しいと外へ出る時間を逃すのだ。

すると、大兒は啓と反對に始終部屋を空けはじめた。萬事にわたつて大兒獨特の風韻のあるズ

ボラが始まつた。自然と氣おくれがして大兒は啓に出會はないようにする。啓の足音を聞くと大兒は居なくなる。

殆んど大兒の顔を見ない日が一週間と續いた。

大體啓は忙しい仕事の共力を大兒に頼んであつた。謂はゞその共力は同居のをりの交換條件のやうなものだ。が、姿を見せない大兒に手助けの續きを頼まうといふは魔術である。啓は猛然と溜つてゐた仕事の仕上げをはじめた。勝手にしろといふ氣持に近い。

その夏は緯度でも替へたやうに雨續きだ。變則の雨にあたつて啓の家には病人が出來た。醫者と藥局への往復で啓の家は二三日混雜した。しかし、誰も大兒の歸宅を待ち構へて助力を頼まうと云ひ出す者がない。これも勝手にしろといふ氣持に近い。

啓はこの關係を放つて置いては下手いと思つた。大兒を無視する事をもつて、一家大兒のズボラから超越するのは痛快な氣持だが、この場合の痛快なといふ氣持はあまり上等なものではなかつた。大兒にしても居にくくなる。いや、現在すでに居にくくなりつゝあるのだが——一體大兒は職を捜しに出歩いてゐるのかしらと、啓は心もとなく想像した。それから、同居の第一日にあれほど意氣込んでゐた翻譯は毎日捗つてゐるのかしら。——兩方ともしかし、どうもその氣配が

ないやうにしか思へない。第一、恒藤辰夫を訪ねたといふ噂話を啓は一向に聞かない。恒藤といふ人物とその才能とを尊重してゐる點にかけては、啓の決して大兒に劣らないのを知つてゐる以上は、大兒は好んで恒藤に會つた噂を啓に向つてしてもいゝのだから。――

いつ通つても靜まつてゐる三疊の窓障子を見ながら、此處のあるじは要するに暢氣のんきに暮してゐたいのだなと啓は思つた。ふと啓は、いつぞや大兒が乙骨に忠告してゐた言葉を想ひ出した。「他人の家に厄介になつてゐたら、君、偶には庭ぐらゐ掃くものだよ。僕だつたら禮ごころに何か片付けて見ないと氣持がわるいがあ」――無人の雜草の庭で啓は笑ひ出した。惡戯まそちを眞面に憤れないやうに、憤る氣になれない。

加賀見が初物の麥藁帽子をかぶつて來たのはかういふ時だつた。加賀見は早速啓に捕まつた。

「おい、榊君は恒藤君のところへ時々打ち合はせに行つてゐるのかい」

「さあ。――あんまり行つてないのぢやないですか。花卷弘志の家には始終遊びに行くやうだけれども」

「何だつて？」

「詩人の花卷弘志です。「牧羊神」といふ雑誌を出してゐるでせう。知らないのですか、大兒は今

月の「牧羊神」にも散文詩を載せて貰つてゐますよ」
「はてな」

啓は立ち上つて、戸棚からその爽やかな月刊雑誌を捜し出した。――「なるほど。今月號といふのは來てゐたのだが」

しかし彼はそこに、榊大兒の名の活字に變つてゐるのを見つけた。佛蘭西の假綴本に使ふやうな軽い紙の眞白さとくつきり對照をなしてゐる印刷インクの色を、啓は一瞬間美しいものに思つた。

「なぜ同じ家にゐて知らせないのだらう。――東中野の友達のところへ行くといふのは、花卷君の話なんだね」

「それあ。――東中野の友達の家にも行くのでせうが」内氣な加賀見は當惑してゐた。「どうして又黙つてゐるのかしら。つまり、花卷氏に原稿を見せてゐるつて、云ひ出しにくくなつちまつたんでせう」

「云ひ出しにくい事があるものか！ 僕は詩人ぢやない。榊君は詩人だ。詩人が詩人に詩を見せるのは當り前ぢやないか！」大兒の小細工に對して湧き起る不滿のために啓は聲を大きくした。

「榊君の發表慾を誰が不自然だと思ふかね。榊君の變り種の詩がつぎつぎに採用されると聞いた
ら僕は喜ばないかね。それほど友情が僕にはないかね。君はどう思ふ」
「これが大兒の筆法なのです」加賀見は眼を外らせ、何故か羞んで顔を赤らめてゐた。「それより
か僕の心配してゐるのは、大兒が花卷弘志をそれほど徳としてゐないやうな素振りを見せる點な
のです。あれでは、終ひに花卷氏が憤つて寄せつけなくなりはいないかと思ふのです。なぜ大兒
は——もつと一人の人に接近して行かないのだらう」

「圖太いのか？ 氣が弱いのか？」

「その正體を見せるのを厭がるのです」

八

加賀見を捕まへたと同様に、啓は翌日大兒を話に捕まへた。蟲を隠した桃の枝の深深とかぶさ
つた窓際に、大兒は久し振りに會ふ友人といふ風な身ごなしで現はれた。と、膝をつき合せて、
啓は大兒のひどく健康らしく日に焼けたのに氣が付いた。同じ家にゐて相手の日焼けに物珍らし
く氣が付くといふのは滑稽な出來事に違ひない。結局のところ冗談ばなしで濟みさうだなと啓は

思つた。

「君、この頃はどうしたんだい。これぢやあ夜同じ所に泊つてゐるといふだけの話ぢやないか」

「え、まあそんな所です」

いや、冗談ばなしでは濟みさうもない、と啓は思ひ直した。輕妙至極に出鼻を挫かれて、啓は
不意にムカムカとした。

「まあそんな所つて、さうでない心意であるのならばはつきり云ひ給へ」

「——いえ、その通りです」

大兒は勝手が違つた。大兒は悄氣た。こんな野暮な會話を俺は得手ぢやないといふ風に。

「君は妙に居にくくなつちまつたんだらう」

「まあさうです」

「君ひとりで居にくくしてゐるんぢやないか」

「さうなんです」

「つまらない事になつたもんだなあ」

「まつたくです」

「君はなぜ又、花卷君のところへ行く話を僕にししないの」

「え？ つい云ふ暇がなかつたんです。それに——あすこは遊んでると氣樂だから行くんです」

「そんな言ひ方つてあるものか！」啓はよく識らない詩人のために義憤らしいものを感じた。「さうぢやないだらう。花卷君は君の才能を愛してくれてゐるんだらう」

「……………」

「兎に角さうだらう！」

「まあ、さうらしいです」

「それならば花卷君と君との關係は純粹なものぢやないか」

「——さうかも知れません」

「さういふ純粹な關係を君はほかに幾つ持つてるの。それを考へて見るといゝな」

「一つも、持つちや、ゐませんね」

大兒は不意に噎がれた聲を出した。そして窮屈な假面を脱いだ。

「僕は憎まれ役になつても仕方がないと思つたんだ。君は忠告がましい事を云ふ友達からはすぐに遠のくのだから。——しかし、誰か一人は君に向つてその役を一度引き受けてもいゝのだと思

ふよ。さうでないとは君は孤獨な人になつてしまふ」

「孤獨なことは今でも孤獨ですよ」

「それを押し通さうといふ氣でもあるのかい。友達を一人一人利用して行く。——君の筆法がさういふ風に見え易い事は知つてゐるね。それで君は徹底する氣かしら？——その邊が一寸君は謎の人物に見えるのだけれども」

「さうですね。それで徹底出来たら、いつそ、幸福だと思ひますね」

「すると教會行きもその方かしら。大博突過ぎやしないか」

「大博突で通せたら——もう少し愉快なんでせうね」

「ぢやあ僕の見當のとほりだ！ 君は弱氣な人なんだね」

「當つてますね」

「それで恒藤君のところへ行かない理由も分つた。——さうだらう？」

「えゝ。——さうです。——どうせ恒藤氏と付き合へば嫌はれることは判つてゐるんです」

啓は黙つた。啓は妙に淋しくなつた。

「僕なんぞ、教會で嚴重に縛つてゝも貫はなくつちや、浮ばれないんです」

しかし今しがたの大博奕云々の直ぐ後で、啓はその言葉をどう解つていゝものか分らなかつた。すると大兒が續けさまに云つた。

「僕なんぞ、何も持つちやゐませんよ！」

そして思ひがけない事に、啓は大兒の野鼠のやうな眼の突然光るのを見た。それから睫毛に溢れて來るのも。

「そんな事はないさ」啓がそれを見ないようにして、奇妙な友情から却つて喧嘩腰に遮つた。「君は今テレちやゐない。テレ隠しを云つてゐない。君は本性を見せたぢやないか。今僕に見せてくれた本性を君は持つてゐるぢやないか」

「いや。さうぢやないです。——さうぢやないです。——もうひと息、僕が圖太いと、却つてそれも僕らしくなるのですがね」

光澤に充ちた悲鳴ともいふべきものを、啓ははじめて眼のあたり経験したやうに思つた。この友達は極彩色のサイコロを汗のじむほど握つてゐる。息をこらしてこの男は大きい場を待つてゐる。が、この男は一か八か、擲きつける力を持たないのだ。そして力のないと知つた時に、かういふ男は世の中でどう手を替へればいゝか。……………

言葉のつゞきを失つたやうに、二人はぼんやり窓の外を見てゐた。が、心持の幾分和らいで來て來た啓は振り返ると、冗談に戻して云つた。

「いや、君の話は僕は信用しないよ。君は『誰か人形でないだらうか』の作者ぢやないか。——君の本音は巴里ぢやあ夙うに、モンソウ公園で町つ子に聞かせてゐるのぢやないか」

九

秋のはじめの日曜日に、啓はカトリック教徒たる妹の受洗式に立ち會つた。それは色硝子の窓の外に百舌鳥の啼いてゐる朝まだきであつて、まだ陽のさし込まない禮拜堂の冷氣に云ひふくめられでもしたかのやうに、其處で歌はれる讚美歌は一段と細く澄んだ讚美歌だつた。

啓はすぐ横にヴェールを深くかぶつた異形の妹を見た。それから、やがて日本語の下手い神父が進み出て型のごとくに問答がはじまると、啓は妹の臆した聲を僅かに聞きとつた。——

「はい、信じます」

「信じます」

「信じます」

證が濟むと同時に、正面の高い燭臺が象徴として一つづつ點されて行つた。と、今度は急流のやうに激しい歌が天井を壓して湧き起つた。その歌は本望を遂げて泣き崩れてゐる啓の妹を取り巻いて、しきりに「あなうれしや、あなうれしや」の冠句を繰り返した。啓は愕然として木魂のある天井へ仰向いた。

それは木魂ではなかつた。彼は二階の床に満ち満ちて跪いてゐる佛蘭西、西班牙、愛蘭土の尼僧の群にはじめて氣が付いた。が、尼僧たちばかりではない。會衆のすべてが儀式の律を誦んじて一齊に跪いたり、一齊に立ち上つたりした。天井から落ちてゐる絲に操られてもゐるやうな、それは動作だつた。

幾つかの讚美歌がつきつきに起つた。啓をまでいつの間にか讚美歌は包圍した。人間の小さい故に父なる神に頼るとその歌が云ふ。しかし啓は人間の——個人の小さい故に種族に頼る。種族の綜合に頼る。種族の生活力の流れに頼る。氣流と太洋と植物と昆蟲と鑛物と、そして人間とに共通する永遠回歸の方則に頼る。

會衆のすべてが整然と動く中で、勝手に不案内な啓ひとり正面を向いた儘椅子に腰掛けてゐた。——

啓の妹の受洗が濟むと、列をつくつた會衆が聖壇の前の欄まで近づいて順順に跪いた。跪いた者は欄を覆うた白い布を手にとつて、子供のエプロンのやうに願にあてながら神父を待つた。唇を濡らしてくれる神父を待つのだ。弱さが最初的美徳であるこの壁の内で、それに應はしい象徴を待つのである。

その列のうちに啓はひとり變つた人物を見かけた。散歩服風な脊廣を着た外國人だ。四十前後とも見える、そして口髭を瀟洒に手入れしたその外國人は神父に唇を濡らして貰ふと、ほかの會衆と同様立ち上つて、俯きがちに掌を組み合せたまゝ出口へ去つて行つた。が、一步往來へ出れば、どう見てもそれは蹴球見物の常連といふ風采であり、ホテルの食堂では六つかしい注文を出し、休日には自動車旅行をする男としか思へない。要するにその紳士は運轉手やタイピストや會社ボーイに、日曜日の朝の神妙さを覺られるやうな事はしないであらう。……………

啓はふと、看病のために淺草の家へ歸つてゐる大兒を聯想した。

十

式が終つて薄暗い廊下から石段へおりた時に、啓は朝日の一面にあたつて來た運動場でいつの

間にか日曜學校の子供たちに取り巻かれてゐる先刻の神父に出會つた。近寄つて行つて啓は今日の禮をのべた。すると、それまでもしきりに子供達を笑はせてゐた神父は、啓にも早速老人らしい諧謔を向けて、なかなか離しさうにもなかつた。

「あゝ、あなたがお兄さん？ よく似てゐます。——今年の夏休みは雨が多くて年寄にはいけなかつた。わたくしももう少しで天國に行くところだつた」神父のズボンに引つ着いてゐる子供たちは大笑ひに笑ひたてた。「あなたのお妹さん、今日は大へん音無しかつた。今度はあなたの番です」

話題に當惑して、啓は大兒の噂を持ち出して見た。といふ譯は、この神父は大兒の通つてゐる小石川の教會からその女學校の禮拜堂に向いたのだから。

果して神父は大兒を知つてゐた。手眞似をつかつて大兒を褒めた。自分が教へてゐるのではないが羅典語がうまいさうだと云つた。しかし最後に、啓のまつたく知らなかつた事實を快活に教へた。

「あの人も直きに洗禮受けます。そのこと聞きませんか」

「——聞きません」

「多分、さう、再來週です」

「あの人が洗禮を受ける！」

すると反響のやうに、神父が穩やかに笑ひながら云つた。

「さう、あの人が、洗禮受けます」

尼僧たちと記念寫眞を撮る妹を残して、ひと足先きに濠端の並木通りを戻りながら、啓の心持は奇妙に壓しつけられた複雑なものだつた。啓はやはり漠然と大兒に責任を感じてゐた。大兒の生活のうへの曖昧さを手厳しく問ひ詰めたのはまさしく啓だ。そして啓は兎も角も大兒に一番接近してゐる友達の一人に違ひなかつた。——啓は大兒の言ひ分を想像した。啓の空想はひろがつて行つた。

「僕は君達に告別する。笑ひ聲よりも短い挨拶をする。巴里でない、バルセロナでない、リオデジャネロでないこの東京では、友達の家から家を歩きまはつて見たものゝ、やはり上陸した船員のやうに僕は落ち着かない。僕は街まちでの附きあひに堪えない。共同の「仲間」になれない。そこで僕はいつそ熟睡して見ようと思つた。僕はオルガンの鳴つてゐる、鳩のとんでゐる屋根の下に

入つて梯子をかけ、天井から光線と一所に落ちてゐる絲に僕自身をコマ結びに結びつけた。そして僕は本望を遂げた。分裂しないアヤツリ人形になつた！——街では絶望の果と云ひふらすけれども、此處ではそれを生きる道だといふ。

アナトオル・フランスは論文まで書いて博奕のまへに禮拜したのだが、しかし僕は佛蘭西人のフランスぢやない。——僕は夙うから知つてゐる、博奕には壯麗きはまる見かけ倒しの空想が二つ、是非とも必要なのだ。人間の無制限とサイコロの必然と。——こいつはアルコオルの火よりもありありと眼の前に燃え上らなくてはならない。それは活動のセットのやうにキラキラ飾り立てゝ納まらなくてはいけない。

しかし僕はやはり知つてゐる。無制限と必然とは人生のものぢやない。それゆゑ——僕は博奕を断念して、自分で名前を制限する。人からされる前に自分でする。かつて僕は自分をピノチエツトと自嘲した。しかし今はもう一字その頭に加へて、もう一段と自分を狭めて自嘲する。笑ひ聲よりも短かく、そうして君たちに披露する。聖ピノチエツト。……」

帽子とすれすれに茂つた並木の下で、圖に乗つて大跋に歩いてゐた啓は不意に淋しくなつた。

(昭和三年十一月作)

亞刺比亞人エルアファイ

マラソン競走の優勝者、佛蘭西領アルジェリイ生れのエルアフィは少しばかり跛足^{びつこ}を引きながら地下室の浴場に入った。

一九二八年の八月五日の夕方であつた。そこはアムステルダム市外にある國際競技場に附屬した浴場だ。北歐の八月は沙漠に育つた彼には秋に等しい。午後の三時から二十六哩四分ノ一を走り通した後で、空色の地に赤い鶏を染め出した佛蘭西代表のジャケットを脱ぐと、エルアフィはやはり幻覺を感じるほどに疲れてゐた。

彼は不意に耳をそはだてた。

ラ・マルセイエエズの吹奏樂を競技場の方角に聞いたやうに思つたのである。

「はてな。觀衆が熱狂してもう一度繰り返へさせてゐるのかな」

しかしそれは奏樂ではなくて、ほんの一瞬間のうちに消えたアムステルダム發巴里直通の急行列車の汽笛であつた。それほどに彼は、やはり昂奮してゐたのだ。

湯槽に仰向いたエルアフィの胸はまだ魚のやうに喘いでゐた。乳の間隔がひどく開いたり縮ま

つたりした。彼は人種學の教へるとほりに黒髪で、面長で、銅いろの額が廣かつたが、その手入れのいゝ髪につけてゐる油はまさしく巴里生粹のものでつた。シャワーをねぢつて彼はその髪の毛の汗臭さを落したが、すると、此處のシャワーは細かい湯を降りかけながらくるくる廻るシャワーであつた。さうだ。今日の走路の至るところにかういふものが廻つてゐた。——回想しながら彼は顔をしかめて、降りそゞぐ温い雨のなかで眼をつぶつてゐた。——運河のほとりの無数の風車。人垣のなかでどこの國の民族性よりも喜怒哀樂をあらはした佛蘭西應援委員。最後の一キロまで彼から十米とは離れなかつた智利人のプラザ。頬骨の出てゐる日本のヤマダ。頭髪が麻いろで、それが青いジャケットと釣り合ふやうに染めてあるのではないかと思はれた芬蘭のマルテリン。到着を知らせる表門の喇叭。そして最後に、影の長い夕日のなかで押しあひながら動いた新聞寫眞班。……

彼はいまこそ自分の二時間三十二分五十七秒を清算した。

數學の式を分解するやうにいまそれを分解した。——
扉があいて、オリムピック競技の象徴である五色の輪を帽子に縫ひとりした僕が覗いた。エルアフィは選手監督がマツサージ師をよこしたのだと思つて誰ももしなかつた。すると、隙き間を

すり抜けるやうにして靴から先きに忍び込んで來たのは、細面の、眼と唇の子供じみた、パリジャン好みの装をした、薔薇の花束を一抱へかゝへ込んだ新聞記者だつた。新聞記者だとひと眼で判つたのは腕に巻いたしるしの布からである。記者は妙にこゝこゝして、まるで彫刻家が美術館の彫刻にでも近づくやうにエルアフィの裸體へ無雜作に近寄つて來た。

「誰だ。誰だ。君は」

エルアフィは狼狽して、タオルを腰に巻きつけながら怒鳴つた。

「御免下さい、ムツシユウ、大變お邪魔をして」記者は遣り口の突飛なわりには、それでも顔を赤らめて低頭してゐた。つまり圖圖しいよりも熱狂の力で侵入が出たものらしい。「この名刺をどうぞ。僕はその、ル・タンの特派員です」

「ル・タンの特派員ならばひとの風呂場に入つてもいいのですかね」

「済みません。済みません」若い記者はエルアフィの顔いろを見て、一層巴里人むき出しの早口で謝まつた。「私は通報機關です。本社から至急詳報を命ぜられてゐるのです。それに私は、ムツシユウの裸體をはじめてははらないのです。七月二十六日の夕方に、そら、マラソンコースの復路だけを極秘のうちにあなたが試走されたでせう。あの後でマツサージの粉が足りなくて、あなた

は大變怒つて居られましたね。その時にすぐ自動自転車で選手宿舍まで粉を取りに行つた男があつたでせう。あれが私なのです」

さう云はれて見れば、けふも往復三十キロほどマラソン走路に沿つてゐた運河の上のモーターボートから、三色旗を振りながら誰よりも熱狂した聲で、先頭を切つてゐる他國の選手と彼との距りを絶えず知らせてゐたのもこの青年らしかつたと、エルアフィは次第に想ひ出して來た。この青年は生粋の巴里語でエルアフィが刻々に追いつきつつある日本人、亞米利加人、芬蘭人、加奈陀人に就てひどく洒落のまさつた批評を加へては、沿道と船の上の佛蘭西語のわかるすべての人間を笑はせてゐた。この若者は應援隊の哄笑の中心だつた。活氣の要素だつた。——エルアフィはいまその洒落の一つを思ひ出して、知らず識らずこの男に笑顔に向けてしまつた。

と、新聞記者はもう公然の許を得たといふ身ごなしで、浴衣のかゝつてゐる椅子に花束を置くと、その端に自分も腰をおろしながら、手帳を開いて云ひ譯するのだ。

「失禮します、ムツシユウ。こんな奇矯な事をやらないと大戦後はなかなか喰つて行けないのです。私は元來詩文をつくる方なのですが、巴里のやうに世智がらひ都會では、文士も第一歩は奇抜に出ないと生存競争に負けるのです。巴里は流行第一の市まちですからね。御承知でせうが「エツ

フェル塔の結婚」といふ評判の踊を書いたジャン・コクトオ。やつは私と左程齡も違はないのですが、その手でたうとう飛躍しましたよ！ こんな癖が私にもつい附いてしまつて、それに、家の母親や妹がまだ私のパンのためにその癖を頼みにしてゐるのです。——そこで、御感想をうかがひたいのですが」

「感想？ 感想はさつきスタヂウムで聯合記者團に話してしまひましたよ」エルアフィはこの青年に少しづつ馴れて、石鹼のついた両足を思ひ切り湯の面に浮かした儘、笑つて應酬した。「君は折あしくそこに居合はせなかつたと見えますね」

「どうしまして！ あれはこの通りもう打電を済ませて來たところですよ」記者は手帖の頁をめくつて證據を見せた。「さやう、あなたはこんな風に仰つたのですね。闘牛士出身の智利のプラザがいつまでも影のやうにあなたの後に付き添つて、薄氣味のわるかつた事——日本の選手は勝を急いだ氣味があつて、それにふだん優美な苔の道を駈けてゐたせゐか、敷石道では少し勝手が違つて見えた事——あなたは又何者よりも傳統を持つた芬蘭のラクソーネン、マルテリン、コスキ、ラスタスの一團を恐れた事——前回の勇者米國のデ・マールの衰退は意外であつた事、そんなお話でしたね。しかし、うちの主筆はもつと詳しいあなたの印象を纏めるように命令して來

てゐるのです。祖國は八百米競走でセラ・マルタンを遁のがしましたからね。それから千五百米でもラドウメニユを遁のがしました。優勝を遁のがしたばかりでなく優勝のニウスまで遁のがしまつたのです。そこへあなたが大きい特種トウキョウを作つて下さつたのです。ル・タンは優勝者には三段分の記事を用意する筈です。明日は巴里は役所でもカツフエでも涌き返るでせう。——失禮ですが、巴里のムツシユウのお住居は？」

「どうせパツシイといふやうな場所ぢやありませんよ。わたしは自動車會社の技手なのです」

「もうどのくらゐ巴里にいらつしやいますか」

「三年」

「それからと、生ひ立ちなども少し伺ひたいのですが。——アルジェリイからおいで、したね」

「さうです。砂や蠅のなかで育つたのです」エルアフィは思ひついて、不意に忍耐強い眼をあげた。「時に、あなたはテユニスから三百哩ほど奥へ入つたビスクラといふ町の名を——名前ぐらゐ聞いた事はありませんか。もしかするとおありかと思ふのだけれども」

「ビスクラですか？ えゝ——ありますが」

「あそこが私の郷里です。さう、ビスクラのやうなちつぽけな町を御存知だとすると、旅行記か

何かからすな」

「えゝ、旅行記もさうですが——」

「ああ。さういふ御返事だと又面白いです！」エルアフィは待つてゐたといふ工合に天井を向いて狡く笑ひ出した。「當てて見ませうか、あなたは文士だと仰有るから。——名高い小説からでせう。私は軍隊にゐる時にはじめて聞いたのです。ビスクラを種たねにした小説本があると、私はつい未だに讀まないのですが、どうもその小説は私がまだ家にゐる時分のビスクラを書いたものらし

51

しかし若い新聞記者が興味を起して何か訊ねようとした時に、ノツクの音でマツサージの用意の出来た合圖があつた。

「かうませう」と、アルジェリイを場末扱ひにしないでくれる青年記者を前に置いて、エルアフィが先刻よりすつと機嫌よく云ふのだ。「マツサージをして貰ふ間だけ、あなたに時間を割きませう。隣の部屋へ御一所にいらつしやい。私などと違つて小説を澤山讀んで居られるあなたには、恐らく一寸面白い話がありますよ。それがまた、私のマラソンを稽古した事に全然無關係でないのです」

かう云つてエルアフィは石鹼の泡のなかゝら立ち上ると、運動シャツのところだけ皮膚の白くなつてゐる脊中を見せながら浴衣を取つた。エルアフィはそうして薔薇のある椅子の傍へ後ろ向きに立つた。新聞記者にはその瞬間のエルアフィが、異國好みの畫家に雇はれた壯麗なモデルのやうに見えた。

二

「私はアルジェリイ駐屯軍に編入されて、もともと沙漠のなかの支隊から支隊へ信書を運ぶ傳令兵に選ばれてゐたのです。このために私は自然と長距離競走のコツを覺えたのです」

エルアフィは隣の部屋に用意してある、まるで野戦病院のそのやうな寢臺の上に俯伏せになりながら、マツサージ師の肩越しに話し出した。

「尤もそれは大戦直後のことで、もう大ぶん以前の話ですが、昨年秋にオリムピック佛國準備委員會の役員としてこの私を憶ひ出したのは、當時のテュニス本隊付大尉であつた外務書記官のS氏でした。そこで私はアヴニユ・ド・シャンゼリゼの自動車店からコロンブ競技場へ引き出されたのです」

「私にはお望みのやうな生ひ立ちの話もありませんな。また、運動を特に好きになつた動機といふほどのものもありません。もともとアルジェリイ人には靜かにしてゐる生活といふものがないのですから。——たゞあなたの本職といふのをさつき伺つたら、一寸お話しして見たい事柄が一つあるのです。それは郷里のビスクラにあつた話なのです。——十四五年も前でしたらう。——」

頸すぢを押されて枕の中に顔を埋めたので、エルアフィは一瞬間黙つた。が、それは記憶を追つてゐる人の動作にふさはしいものだつた。

「たしか降誕祭のすぐ後だつた。といふのは私の母親が基督教徒なので、土人の私にも降誕祭の記憶はあるのです。——或る日私の遊び友達の悪童どもが云ふのです。村のホテルにたつた一組佛蘭西人の旅客が夫婦で滞在してゐて、その良人のはうが大ぶん重い病氣らしい。しかもその夫婦は寂しい土地のホテルに退屈しきつて、村の子供たちが庭に入つて遊ぶのを大變喜ぶし、時によると二スウから五スウ、少くとも菓子を呉れる事は保證すると。——私はよく覺えてゐます。山羊小舎の柵の上でその客人の噂を非常に珍奇なものに思つて、兄にすぐさま告げ口した。一體北部阿弗利加ではその時節が一年のうちでも氣候のわるい變り目で、婦人を連れた遊覽客と聞い

ては尋常に思はれないのですから。——私はもう十六七で、正直のところ子供でなかつた。愛らしくもなかつた。が、好奇心と慾に驅られてホテルの土塀をそつと越えたものです。」

「その佛蘭西の紳士は脊の高い、額の廣い、眼の澄んだ、言葉の至つて少ない人でした。寢臺に寝たきりで、子供達がコルク倒しをしたり、角力をとつたり、喧嘩をはじめたりするのを見てゐました。黙つてゐる時には怒つたのではないかと思はれるやうな様子だが、しかし一旦物を言ふとなると、不意にそれが優しい眼つきの人に變るのです。この癖を呑み込むと子供達はホテルの露臺にまで入り込んで遊ぶようになった。——ホテルと云つても白い石灰を塗つたまゝの平屋建であつて、私の國の習慣として露臺は荒れて見えるほどに廣い。その露臺から棕櫚の木を越して町はづれの果樹園のオアシスが見え、更にオアシスの向ふには沙漠がだんだん高まつて擴がつてゐました。——病人の部屋はひどく寂しくて何の額がも懸つてゐなかつた。たゞ天井までのガラス扉が露臺へ開いてゐるのです。だから病人は一つの大きい穴をとほして沙漠と向ひ合はせになつてゐたものです。」

「まつたくそれは靜かな夫婦だつた。なぜといふにアルジェイの土人は「ホテルが汚い。人間が醜い」と云ひ散らす旅客に馴れてゐたからです。殊にその奥さんが物優しかつた。といふのが旅客で大袈裟に苦情を云ふのがいつも女の方であつたからです。奥さんは飾もない帽子から黒いヴェールを深く垂れてゐました。今から考へれば服喪のしるしらしい。そのヴェールが金髪の艶を隠して、顔を實際よりも遠くにあるやうに見せてゐた。——奇妙な事にこの夫婦は一つ部屋で離れ離れに物を考へてゐる時が多かつた。少くも私の見たところではさうでした。良人が何十分もの間ぼんやり空や沙漠を見つめてゐると、奥さんはその邪魔をしないようにして、本國へ書くのであらう手紙の封を幾つとなく、そして一つ一つ唇で叮嚀に濕してゐました。が、この離れ離れに見える奥さんは土人の眼には一層華奢で美しかつた！——白人の夫婦が腕を組んで歩く時に見せびらかすところの二倍の横柄さを、私たちの種族でないあなたには到底想像がつかないでせう。」

「或る日、ホテルの洗濯ものを引き受けてゐた村の女が露臺の奥さんを見つけると、瓶に入れた地酒を賣りつけに近寄つて行きました。地酒は棕櫚の幹に切り傷をこしらへて、そこから垂れる滴でつくるやつです。ところがこの説明が洗濯女には出来ない。庭の子供にも出来ない。そこで私が呼ばれたのです。私はいつも土塀の破れ目に足を組んで、近づきになる機會を辛抱強く待つてゐましたから。——私は親から出世のためにと云つて少しづつ教はつてゐた佛蘭西語で、どう

やら通譯してのけた。そこへ遅れ走せに駈けつけた黒人のボオイが、私を見ると奥さんに説明したので。「なるほど、この子は親がテュニスでホテル勤めをしてゐましたから一寸喋れます。母親は母親で基督教徒ですよ、奥さん。散歩の時にはこの子をお使ひになるが御便利ですな。こいつは駝鳥のやうにすばしつこいが、いえ、あまり物を壊したり盗んだりは致しません——私は金髪の奥さんの前で全く赤くなりましたよ。拳骨でひと撃ちにそのボオイを撲り倒してやらうかと思つた。が、奥さんは基督教徒の子と聞いて安心したのでせう、それ以來私といふものを覺えてくれました。」

「石と砂ばかりといふ庭のベンチで、手眞似を少し許り混ぜて貰ひながら、私は奥さんの口からこの本國人夫婦の身の上を多少知りました。この夫婦はまづ新婚といふべきであつた。新婚後はじめての旅行にマルセユからシシリイ島に渡つて、さらにシシリイからの便船で大陸のテュニスに來たのです。良人の父親の重病のために、長い交際もなしに結婚を急いで——この遣り口はどうも佛蘭西風よりは亞刺比亞風ですが——葬式が済んでからはじめて慰勞の旅行に出たのであつた。が、南方の氣候をまつたく信じて、厚着の用意もなしにこの大陸へ來て、長い間の看病に疲れてゐた良人は驛馬車のなかで突然血を吐いたのださうです。(かういふ事を話す時に奥さんの

見せた笑顔は影が多くて、そのために大變奥さんに似合ひましたよ。) 奥さんはまた良人が巴里で本を書く人だと教へてくれた。——次の日に奥さんはテラスから降りると、白い本を一冊持つて私の傍へ來ました。「これが昨日話した、ムツシユウの書いた本ですよ。表紙のこゝは讀めるでせう。讀んで御覽なさい」

カシイの花の匂つて來る石の上で、私は無器用に字を拾ひました。

「ア・ン・ド・レ・ジ・ツ・ド」

三

エルファイの云つたその名前を聞くと、ル・タンの記者は思はず聲をたてた。

「何ですつて！」意外でもあるが、商賣氣からも刺戟された聲だつた。「アンドレ・ジツド？ あなたは「狭き門」や「プロメテ」や「背徳者」や「アフリカ紀行」の作者の噂をなさらうつていふのですか！」

そして記者は「背徳者」のなかにあるアルジェリイの美しい描寫を不意に想ひ浮べた。

「さうです。あの後澤山のよい本を書かれたといふムツシユウ・ジツドとの因縁を、さつきから

お話ししてゐるんです」

エルアファイはもう一度、狡くて無邪氣な笑ひ聲を天井へ打ちつけた。われわれの物に馴れる本能で、エルアファイはこの若い記者の抜け目なさがどうやら快くなつて來たのだ。——が、彼は急に口を曲げて耐らへた。マツサージが腰骨の急所に觸れたので。

「——私はその時、偶然にも生きるか死ぬかの重態にあつたムツシユウ・ジツドを識つてゐたわけです。實際ムツシユウはたゞの容態ぢやなかつた。或る晩なぞはカンテラを點けて、駐屯軍の軍醫が馬を飛ばして來たりしました。私は奥さんから小遣ひを貰つてゐたし、この晩も用を云ひつけて貰はうと待ち構へてテラスの隅にじつと足を組んでゐたのです。が、やがて軍醫が「お休み」を云つて立ち去つた後で、奥さんはいつものやうに「誰かボオイさん」とは呼ばずに、不意に取り亂して、優しさを籠めて、寢臺へ寄つて行きました。私は見つかつた時の奥さんの怒りを想像して赤くなつた。

「わたしのためにお祈りするんぢやないよ」……やがて私の豫想とはまつたく違つて、ムツシユウ・ジツドの低い傲慢な聲が聞えて來ました。「わたしは保護を受けるのなんぞは嫌ひだからね」
「どうしてなの？ アンドレ。……」

奥さんが情けないといふ調子で訊き返してゐるのです。

「あなたお獨りでは癒りませんわ。可哀想に」

「ぢやあ仕方がないさ」寢返りでもうつたのではないかと思はれる間があつた。「——氣の鎮まるやうにして置くさ」

私はそろそろテラスを逃げ出さうかと思つた。

「あなたは神様のお援けを斥けていらつしやるのね、アンドレ。分りますわ」

「……………」

「あなたは別のものに頼らうとしていらつしやるのね」

「……………」

私は吠えつく犬を叱り飛ばして土堀の穴をすり脱けました。が、あの光澤のいゝ髻を生やして傲然としてゐる紳士が、まるでうちの母親から私の問ひ詰められると同じやうな事柄を、奥さんから聞き訊たされてゐるのにはまつたく驚きました。透き徹つた星の下で、私はムツシユウ・ジツドと自分とはつまる所仲間なだと思ひましたよ。ムツシユウも教會へ行つて足をしびらすのは嫌ひといふ手合ひだと呑み込みました。これは野生兒には痛快な發見であつた！ 私がムツシユウ

に對して持つてゐた微かな毛嫌ひを取り除いたのはその晩あたりからだつた。――」

「ひと月も経つと、しかし、ムツシユウ・ジツドはやうやく外へ出られるようになった。ムツシユウは村の子供を介添にして、毎日歩く距離を少しづつ伸ばして行きました。たうとうムツシユウはあの露臺から見えたところの、町外れの果樹園まで歩けるようになった。土語でセギアスと云つてゐる灌水用の堀の、幾すぢとなくめぐつてゐる單調きはまる果樹園です。ムツシユウはこのベンチで子供を相手にいつも長い休息をしました。雉鳩の微かに聞えるベンチであつた。――が、私はなぜムツシユウが白人の習慣のとほりに奥さんを連れて行かないのか、不審でならなかつた。私は或る日思ひ切つて奥さんを誘つて見た。奥さんは大變喜んで、しかし私にムツシユウの外套をあづけながら断りました。

「いゝのよ。いゝのよ。あなた達で行つていらつしやい。ムツシユウはいま病氣と精一杯取つ組みあつていらつしやるんです。だからわたしのやうな弱蟲とよりはあなた方のなかへ混つて、あなた方の悪戯に見とれていらつしやりたいのよ」

氣の毒な――といふ眼付を私から感じたのでせう、奥さんは直ぐにほかの事を云つて紛らせました。

「それよりか、エルアファイ。ムツシユウがもつと元氣になつたら、今度あなたの家へ行つて見ませうね」

「でも、僕の家はあんまり汚いのですから」

「そんな事を氣にかけないでもいゝのよ。私は信者同志の訪問をするのですもの」

「ぢやあムツシユウは？――信者ぢやないんですか」

奥さんは一瞬間私を視つめました。

「ムツシユウも――信者です」

と奥さんが云つた。

「たゞ、ムツシユウのはプロテスタンと云つて、分らないでせう？ 私の神様とは少しばかり違ふのですよ。ムツツユウは戦つて行かうとなさるのよ。私のは神様に唯おすがりする信者ですけれど――」

しかしそれきり、奥さんは笑つてやめました。やめて――外套を果樹園へ届けてくれ、そして日が陰つたらムツシユウが厭がつても着せてあげてくれ、かう頼んでテラスへ引つ返しました。

……」

「アルジェリイでは二月に入ると急に豪雨が續いて、その合ひ間の晴れた日はぐつと氣温がのぼるのです。まさしく熱帯風な春の前觸れです。ジツド夫妻はそこで荷物を纏めて、巴里の家ではない、ノルマンディの郷里へ行つて後養生おとやうじやうをする仕度を始めました。だから、その儘であつたならば私は奥さんの便利な小使になつたゞけで、別にムツシユウとは何の因縁も持たずに終つた筈です。ところが出發する少し前の晴れわたつた日に、ジツド夫妻は突然私の家の入口まで散歩がてら来てくれた。ムツシユウは文士だから亞刺比亞人のふだんの生活といふものを一度見て置きたかつたのでせう。私の家は砂地の中庭を取圍んだ粗土造りの平屋で、入口は乗馬の儘でも入れるように高く穹形ゆみなりになつてゐました。——私の父はその時鐵砲の手入れをしてゐた。母は水瓶を頭に載せて井戸へ往復してゐた。兄は半裸體で寝ころびながら盗んだ笛を吹いてゐた。が、私が白人の客を迎へたと見ると一齊にうろたへて——飛び出して挨拶したり、奥へ逃げ込んだりしたのです。ムツシユウ・ジツドはそれを大變面白がつた。白い頭巾や着物が光つて間誤まごつくのを興がりました。」

「私の父は口ぎたなく羊や駱駝を追ひ立て、そのかはり厩から自慢の仔馬を引き出してムツシユウに見せました。われわれ亞刺比亞人がどんなに亞刺比亞馬を大切にするかは御存知でせう。

と、馴れない服裝の客人を見て、仔馬は急に耳を立てると跳ね上りました。仔馬は父の手を振りほどき客人の胸をかすめて駈け出した。私の父は見事仰向けに轉がつて、それから老人の醜さをさらけ出しながら無駄にも後を追はうとしました。突差に私は中庭の入口に向つて斜に走つたのです。私の敏捷なことは兄弟ぢうでも定評であつた。私は穹形ゆみなりの庇の下で往來へ走り抜けようとする仔馬に間に合つた。横飛びに一間ほど飛んで、鬣たてがみをつかまへると、私は引きずられながら腕うでいて背中へよぢ登りました。——やがて中庭をひと廻り輪乗りして見せた時の、ムツシユウの満足は大したものであつた。何をそんなに感動したのか私には分らなかつた位です。ムツシユウはいま精一杯活躍させたばかりの、そして擦りむき傷から血のにぢんでゐるところの私の手足をさすつて見て、思はず獨り言のやうに云つてゐた。——「ああ、達者なものだ。本當に羨ましいものだ。このすんなりした筋肉はどうだらう。君の今つかまへた美しい仔馬の比ぢやない」

正直に云つて私はしばらく厭な氣持がしたのです。しかし、ムツシユウ・ジツドはそれ以來目に見えて、出發の日までを私に愛想よくしてくれました。——それから一週間。ジツド夫妻は驛馬車でコンスタンティヌへ發つて行つた。私どもは砂の道を一キロも走つて、その頃そもそも起工してゐた鐵道線路に添つて送つたものです。——さうさう、私の母に奥さんの遺して行つた

形見が、いまでもビスクラの家にある筈です。それは聖句の刷つてある綺麗な槩であつた。奥さんは私の母にかう云つて渡しました。

「ムツシユウにはお禮を云はなくてもいいのですよ。ムツシユウはこの文句がどうもお好きではなくて、本に挿んであげた時にもお怒りになつたのですから」

私もいつとはなしにその句を覚えてしまつた。それはペテロに與へた基督の言葉であつた。

「汝今こそ、自ら好む處を歩めども、老いたらん後は手を伸べん……手を伸べん……」

四

日が落ちかゝつてゐた。スタヂウムの觀衆を散らした筆法で、秋風がこの部屋でもマツサージの白い粉を敷布に散らしてゐた。と、マツサージ師は隅の窓の透き間に澤山の顔の押し合つてゐるのを見つけた。優勝者エルアフィを見たがる女子供だ。マツサージ師は亂暴に透き間を閉めてしまつた。それで萬事お終ひだつた。何故ならば此處の休息室の窓は運動家の神経を鎮めるために、すべて刷り硝子にしてあつたから。――

「三年経つてムツシユウ・ジツドは又アルジェリイに來ました。私は實に奇妙な場所であつた

のです。私はその頃佛蘭西語を資本にコンスタンティヌの町へ出て、新らしく出來た鐵道會社の案内係をしてゐました。やがてはニスか、せめてマルセユの洒落れたホテルの事務員になるのが私の望みでした。私は儲けた金をカツフェではたいてゐた。線路工夫や殖民地稼ぎの放浪者の巢窟で毎夜ごろごろしてゐた。私のムツシユウ・ジツドに出會つたのは實にさういふ場所であつた。それはスウダン人の出してゐる天幕張りのあやしげなカツフェだつた。私は奥まつた部屋で、敷物から一尺とは高くなつてゐない寢臺のうへで阿片をふかしながら、亞刺比亞女の氣まぐれな踊を眺めてゐたのです。その踊はたゞの滑走のやうに退屈で、その女は私の情婦だつた。喜んで行人に身體を賣るやうな女でした。――夜になつてしきりに東南風が吹いてゐた。と、不意に白人の紳士がステツキで帳を擧げて私達を覗きました。紳士は銃を打つた旅行靴を鳴らして、天井とすれすれに侵入して來ました。「エルアフィ！エルアフィ！たうとう見つけたよ」――紳士はいきなり躡むと、私に心から懐しげな接吻をしたのです。

私はこの遣り口にすつかり驚きました。ムツシユウ・ジツドはあの形のよい髯をとつてしまつて、そのかはり手入れもしない髪を無雜作に伸ばし、眼をぎらぎら光らせて、全く別人のやうであつた。

「どうしたのです、ムツシユウ」私はたしかに狼狽してゐました。「どうしてこんなところを捜し當てたんです」

「君の両親に聞いたよ。それから鐵道會社で聞いた。君は——すっかり大人になつたね」しかし情婦の目の前で、そんな言ひ方は私にあまり有り難くなかつた。

「何でまた、ムツシユウ。アルジュリイへなんぞいらつしたのです、あなたの身體にはさ、つた土地ぢやありませんか」

「生きかへつた場所が懐しかつたからさ」

「ぢやあ奥さんも御一所なんですか」

ムツシユウ・ジツドは一寸暗い顔をしました。

「いや、あれは今カンヌの里家で母親と暮してゐるよ」

「それは又どうされたのです！」その僅かな暗い顔をも見逃さずに、奥さんの便利な小使であつた私は急ぎ込んで尋ねました。「あの美しい奥さんが——」

「僕の病氣が傳染つたのさ。あれは可哀想な女だよ。僕もこの一年、一所にカンヌで靜かに暮したのだ。ところが醫者は——ジローといふ巴里の腕利きなのだが——妻の身體には絶對安靜が必

要だといふし、僕の状態にとつては本當のところ保養旅行がいゝのだが、と云ふのでね。——さう聞くと急に昔の土地が見たくて堪らなくなつたのさ。今の季節の此の大陸は天國ではないかね！ 實を云ふと僕はビスクラからの歸りなんだ。君の郷里だが、ビスクラには失望したよ」

「どうして？」

「鐵道人夫の募集で古馴染は皆散つてゐるぢやないか。アマタルもゐない。ブウバケもゐない。アリもゐない。そして残つた奴は合憎マルセエユの人間のやうに抜け目がなくなつてゐる」そのマルセエユの人間に先づならうと云ふ私は、一寸出鼻を挫かれた形でした。「それから君の家を訪ねた。君の居所を教はつた。——さうさう、僕は此處の鐵道案内局へ行つて、一週間君をガイドとして雇ふ契約を結んで來たよ。——しかし、僕はまだ晩飯を濟ませちやゐない！」

そしてムツシユウ・ジツドは學生か士官のやうに、私と竝んで寢床のうへに仰向けに寝ころびました。

金のある旅客と睨んだのであらう、私の情婦はいやに忍び寄るやうな亞刺比亞風の媚を見せて卓の上の阿片の煙管を故意と下手に匿さうとしてゐた。白人相手の阿片代がどの位うまい儲けになるかは想像がつくでせう。すると、ムツシユウはその女への合圖は抜きにして、いきなりこの

私に尋ねました。

「君はあいつを飲むね」

「いゝえ」と私は不意打ちにどぎまぎして嘘をついた。「この家が密賣をやるので、それでどの部屋にもあんな仕掛けがしてあるのですよ」

「どうだか！——ビスクラで訪ねた時にも、お母さんが僕をつかまへて何かくどくど云つて居られたぞ。こゝにはウイスキーもあるね。葉巻もあるね。君はすっかり實業倶楽部の紳士だね。どれ」とムツシユウは、私の腕をとつたのです。「なるほど、こんな疲れた腕は巴里の邸町に轉がつてゐる。それにこの御大層な容れ物だ」ムツシユウは笑つて、少し滑稽に阿片の煙管を取り上げました。「ひと瓶いくらに附くね。今ぢやあお父さんの仔馬が逃げたら君はどうするね」

「それあ私だつて阿片ぐらゐやりますよ。亞刺比亞人は十五でも嫁を貰ひますからね」むつとして、私は云ひ返したのです。「亞刺比亞人だつて人並みな事はしたくなりますよ。あなた方に、亞刺比亞馬より強いなんて珍らしがられるのは、もう澤山でさあ！」

酔にまかせて、それに情婦の手前、云ひ過ぎたたと氣が付いた時には、ムツシユウ・ジツドは今の瞬間までの人懐しげな笑顔を消してゐた。そして意外な事に、まるで孤獨な人間でもある

かのやうにムツシユウは、私を柔かく視つめました。

「君はあれを覚えてゐたね。——さうだ。——はつきり覚えてゐてくれたかはりに間違つて覚えてゐた」少時して、ムツシユウが穩かに云つた。「それどころか！ 僕は君達の生きる力が好きなんだ。先祖代代の生活の力が好きなのだ。分るかね。エルアファイ」

「それならばムツシユウ。なぜあなただつて飲む酒や煙草が此處にあるのを見て、いゝ顔をなさらないのですか」

「僕がかね！」靴よりも低く、仰向けに頭をクツシヨンに埋めた儘、ムツシユウ・ジツドは肩をつぼめて見せました。「とんでもない！ 僕は食後の葡萄酒さへ飲むのを惜しみたいよ。僕はシラフでゐた方がよっぽど酔ひ心地になれるのだ。夜中でも僕は眼を開いたまゝで眠たいと思ふくらいだよ。何故だらう。生命の値打を知つてゐるからさ。生きてゐるのが堪らなく珍らしいからさ。しかし、そいつを教はつたのは君の國でなんだよ！」

實際ムツシユウは先刻から一滴の酒も飲まないのに、まるで酔つたやうに若返つてゐた。

一君は亞刺比亞馬に喩へられたのは不平かね。どうしてだらう。僕に云はせれば君が三年前に見せたのは、あれは美しい動物力だ。あれこそ僕たちの先祖傳來の力だよ。文明はあれから溢れて

來たのさ、君の今ひどく奉つてゐる文明だがね。——分るかい。僕は神のかはりにこいつを信じ
てゐるんだ。こいつを信じて快活になるのだ。それで、三年前の君達はそのすばらしい標本ぢや
なかつたのかね」

外では東南風の向きが變つたらしい。筵張りの薄い壁がわれわれの寢床を微かに揺るので
その早春の足音をじつと聴きとりながら、ムツシユウ・ジツドは私に出會つたといふ事がどうも
氣に入つたらしく、一人でいつまでも大聲に喋り立てました。私は以前ビスクラのホテルの扉口
に何十分も坐つて知つてゐた。ムツシユウの激しい獨り言は昔からの癖であつた。

「君は覺えてゐるだらう、エルアファイ。ビスクラで僕が散歩の時にあまり妻を連れて行かなかつ
た事を。——今でもこの通り、あの物優しい女の傍をそつと抜け出して來たよ。分つたらう。僕
は猛烈に生きたいのだ。生きたいのだ。この大陸が好きなのだ。歐羅巴大陸にはもう何の魅力も
感じないのだ。それあ奴らは禮服を着て生きた振りをしてゐるさ。奴らは教會へ行つてゐるさ。」
奴らは十分生きたつもりでゐる。ところが僕は奴らの傍へ行くと、もう生きてゐなくなるのさ」
興に乗つて、ムツシユウは立ち上ると低い天井の下を無意味にあちこち動きました。ムツシユ
ウはまた、私の女の置いて行つた銅盤の樂器を鳴らして見た。

「君はがつかりするたらうが、奴らの文明はもう固まつてゐるんだよ。それで自分のつくつた殻
で今首を締めてゐるのさ。ところがどうだらう。やつと地中海を脱け出して昔の土地へ着いて見
ると、こゝにも一人首を締めてゐる男がある」ムツシユウは急に笑ひ出して、冗談を混ぜてくれ
た。「疲れて——氣取つて——勿體ない話だ。やめ給へ、やめ給へ。さもないと今夜のうちにガイ
ドの契約は取消して、さつさとカンヌへ歸つてしまふよ！」

私は實のところこんな風の話がよく分りませんでした。よく分らなかつたばかりでなく、あま
り氣にも留めなかつた。が、ムツシユウ・ジツドと新設の汽車旅行を一週間も愉快に續けた翌年
に、私は本國のアルジェリイ駐屯軍に召集されたのです。私はトウグウルの分隊に編入されて奥
地に入りました。この邊まで入ると沙漠はまつたく際限もなく擴がつて、移動する支隊と支隊と
の聯絡にはその頃として傳令のほかは方法がなかつた。——そこで新兵の何より厭がるのはこの
傳令卒見習になる事です。それは一番能のない、足の強い、馬の代りになり得る男が採集される
のです。ところが最初の體格試験で、私は見事にその一人に選ばれてしまひました。私は大笑ひ
のうちに命令された。古參兵に小突かれたり、帽子のうしろに垂れてゐる日覆ひの布を引つ張ら
れたりして揶揄はれた。酒保の女までが氣の利かない證據のやうに私の新らしい役目を笑ふので

す。私はもう軍法會議も何もない。天幕のなかで小刀を振り廻はしてやらうかと思つた。亞刺比亞人は小刀を上手に使ひますからね。——その時にふと私の思ひ出したのは、ムツシユウ・ジツドの、あの汽車旅行の間にも厭になるほど聞かされた獨り言に近い説法であつた。私は古參兵や女や同僚に對する反抗心から、はじめてその説法に頼つて見ました。するとだんだん強く、だんだんはつきりとその説法の魅力を感じるやうになつた。ガアルダイアの沙漠區域——ワルグラの區域——エル・ゴレアの區域——私はたつた一人で、帽子のうしろに附いた日覆ひの布を聳かせて、小さい砂煙を立て、自分の足音を一日どう聞きとりながら、分隊分隊の休んでゐるオアシスからオアシスへ五時間も十時間も駆け通しました。ともすれば私は日の出と月の出とを、いつまでも起伏してゐる砂の丘の同じ方角に見ました。さういふ時に、私は地球が圓い、地球はいつまでも廻つてゐると教へてくれた土人學校の教科書を目のあたり、身をもつて復習したのです。さういふ時に私は人間が大變小さいといふ、補習學校の教科書を目のあたりしみじみと復習したのです。しかし、さういふ時に私はムツシユウ・ジツドの話のとほり、祖先代代の人間の一番の強みだといふ、限らない動物力を胸一杯に感じて、それを呼吸して、砂漠のなかでこの上なく傲慢になつたものです。風で出來た砂の波の一つ一つに朝の日、晝の日、夕方の日にあたるのを見渡

して、全身をもつて傲慢になつたものです。そしてこの前後七年間にわたる最も忠實な傳令兵としての賞状と履歴書が、私のマルセユエへ出た時、巴里に來た時に、何よりも役に立ちました。——大戰では私は自動車隊に編入された。私は近東地方で土耳其軍と戦つた。私の今後の望みとしては、今の職業で發動機の秘密を知り盡して飛行士の免状を取る事です。肉體の力をまづ相當のところまで永年使つてお見せした私が、もうそろそろ機械の力を司配しようと思ひ立つても、ムツシユウ・ジツドはあながち厭な顔はなさるまいと思ひます。——私の妻はいまトロカデロ廣場の方で百貨店に務めてゐます。——今日の電報が行つたら喜ぶことでせう。——テニス生れの混血兒ですが私は満足してゐる。私どもには、どうも脾弱くて困るやつですが、もう五つになる娘があるのです。」

引見を終へた時に、エルアフィは氣のない様子で枕元の新聞紙を取り上げて見た。今朝のアムステルダム新報だ。マラソンに就てのあらゆる豫想を一面抜きに載せてゐる朝刊であつた。しかし、先刻の一時間以來、それはもう堪え難いほど古い反古になつてゐた。記者から貰つた薔薇を包むにしても、それは花よりも早く醜くなつてしまふであらう。……

歸り途にル・タンの記者は、窓から運河の見える中央郵便局に立ち寄つて、この興味のある會見談の概要を本社へ送ると同時に、次の電報を打つた。

「マラソン優勝者エルアファイは競技の直後特に余を浴槽に引見し、既報の感想のほかに、文學者アンドレ・ジツド氏との意外なる交友に就き語れり。原稿發送」

もう六時であつた。巴里の本社まで無電で一時間かゝるとして——堤防の影とは反對に白く光りはじめた運河では、モーターを具へた引き船が窓枠から窓枠へゆつくり通り過ぎてゐた。

五

六日後。巴里。

「背徳者」「アフリカ紀行」の作者アンドレ・ジツドはこの年珍らしく巴里に落ち着いてゐた。彼はクリツシイの並木通りから一寸入つた裏町のアパルトマンの前で、豫め打ち合せて置いた時間にエルアファイの細君を待つてゐた。呼鈴を押して門番に言傳を頼んでから、四階住ひの女が降りて来る間を待つてゐたのである。

やがて女は鈍いろの石のために影の多い、その往來に降り立つた。仕立直らしい服をつけた、皮膚が秋の葉のやうに黄色味を帯びて、眼が秋の實のやうに黒いエルアファイの細君は、混血兒らしく控へ目にして「先日は」といふ握手を交した。ジツドは俯いて細君に手を引かれた娘を見た。白髪を少しばかり見せたジツドは、子供には適しない愛想を云つて見た。なるほど話のとほり臍病質な、顔いろの悪い子供だと思つた。

ジツドがエルアファイの娘の病弱な事を知つたのはル・タンの記事からであつた。アムステルダム特派員の例の會見談もさうだし、また巴里の本社員がエルアファイの留守宅を訪問した記事にもその様子が書かれてあつて、ジツドはそれを朝の食卓で讀んだのだ。

それから彼宛にエルアファイの細君から禮狀が届いた。エルアファイの細君は何かジツドが良人に長距離競走の秘訣を教へたことでもあるかのやうに、新聞記事を讀み違へたものらしい。ジツドは苦笑したが、しかしそれは素朴な香りを不意に嗅いだ心地のする、穩かな苦笑であつた。彼はすぐに返事を書いてこの半佛蘭西人の細君——テュニス人の太陽や砂を共通の話題にのぼせ合ふことも出来る細君をお茶に招いた。

ホメールとニイチエとマラルメと、この三人の集冊の殊に目立つ書齋で、ジツドはそのお茶の折にエルアファイの細君の口から娘のふだんの様子を聞いたのだ。風邪をひき易くて風邪をひくと

長い。唇が赤くない。そして細君の口振りから察すると、どうも時々微熱の出る形跡がある。——ジツドは胸の病では心肝に傷を刻まれたやうな過去を持つてゐた。頑丈な掌を卓の上に組んで、ジツドは科學者のやうに娘の容體を問ひ詰めた。混血兒の細君の醫藥にまつたく無智なのが彼はいちぢらしくなつた。——ジツドはペンを取つて名刺に添へ書きした。

「差し出がましいやうですが、奥さん、これをお持ちになつて私の友人のジローといふ醫者の意見をお聞きになりませんか。この男ならば十分相談に乗つてくれます。——同じやうな目に逢つた者には、どうもお嬢さんの様子は他人事ではありませんから」

しかし、エルアフィの細君が躊躇してゐるのを見た時に、ジツトはそれでは自分も附き添つて行かうと約束した。並木の落葉がぢきに始まらうといふ巴里でそのやうな容體を放つて置く事はジツドは反對であつた。この年の氣候は夏のをはりの變化が激しくて、それに肝心のエルアフィはスカンヂナビアの體育聯盟に招聘されてゐて、まだ一ト月は留守だつたから。——

ジローの住居はモンソウ公園の裏でクリツツイからはタクシで五分もかゝらない。人によつては亞米利加じみてゐると非難すかも知れないやうな、白塗の清潔なアパルトマンの二階にそれはあつた。が、藥瓶のあるべき棚に分厚な書物などを亂雑に積んで、借家人のジローは客種きやくしゆのいゝ

開業醫といふよりはむしろ研究所の書記の生活に近かつた。この人が昔ジツドの病、ジツド夫人の病の主治醫であつた。それから最も親しい精神上の仲間としてジツドの著作を揃へて持つてゐる友人だつた。ジローはまた知りびとの依頼で絶えず施療患者を抱え込む方面の名人でもあり、それを幾分か生活の義務と心得てゐる、といふ風な男なのである。

助手が娘の姓名容體を書き取つてゐる間に、リンドバアグ好みの新らしい秋服を着けた女が、懷中白粉で頬をたゞきながらレントゲン寫眞室から出て行つた。これがジローを訪ねる患者の最初に受けねばならない試験だつた。そしてこれが表向きの診察時間の最後まで居残つてゐた患者であつた。——やつとこれでひと息つける。冗談も云へる。やれやれと云つた調子で、ジローは扉越しにジツドとエルアフィ母子とをそのレントゲン寫眞室に呼び入れた。

寫眞室では窓を残らず黒い幕で覆うて、ジローは革の手袋と前掛とをいかめしく着けてゐた。ジローは、この部屋の器械や人間の奇妙な格好にもう脅えてゐる娘をあやさうとして、戸棚からアルバムを取り出した。

「そら、お嬢さん、これが何處だか分りますか。——奥さん、これが誰だか分りますか」

それは、白い日覆の頭布をかぶつて亞刺比亞土人の姿に装つた、ジツドその人であつた。うし

ろは砂と太陽と蠅とのビスクラだつた。例の重患の折の紀念に撮つた寫真なのである。臺紙には署名に添へて、現在よりはすつと主角のある十五年前のジツドの文字で、かう記してあつた。

「余は此の大陸の熱と力とを愛す。余はこれによつて再生す。余はこれに據つて虚無に反抗す。」

— A.G. —

アルバムの效き目のあつた間に電氣装置の用意が出来た。下着一枚になつたエルアフィの娘をジローはレントゲン寫真機の眞中にある乾板と刷り硝子板との間に立たせようとした。が、娘はもう泣き顔に變つてしまつた。

「おやおや、可笑しいですね。ちつとも恐い事はありませんよ。——では奥さん、一寸その刷り硝子の間に手をお入れになつて下さいませんか。——よろしい！」

助手がボタンを押すと、器械は蒸汽機關に似た音をたてた。電氣の兩極が小さい稻妻をこしらへた。その響きに打ち消されない用心をして、ジローは急行列車のなかの乗客のやうに聲を高めながら、娘の氣を引き立ててゐた。

「そら、お母さんの手が映つたでせう？ 覗いて御覽なさい。映つても、お母さんはちつとも痛いとは仰有らないでせう」

實際刷り硝子の上には、母親の手の骨が化石した蜘蛛といふ格好に、はつきり映つてゐた。指輪の影像が骨の影像にとつては不似合ひに太くて、今にも音を立て、床に落ちさうであつた。

「今度はこの小父さんだ。君も、アンドレ、お付き合ひに手を出し給へ。——なるほど小父さんの手の方がすつと大きいですね。そしてすつと形が悪い。そら、伯父さんもちつとも痛くないつて笑つてゐるでせう」

心の柔かい氣さく者のジローは隧道トンネルに入つた列車の乗客のやうに、ますます聲を大きくした。「さあ、二人とも痛くないのならば、お嬢さんにもきつと痛くないに違ひない。今度こそお嬢さんの番だ。もう少し奥へ入つて。その黒い板の前に立つて」

欄干を擦り寄るやうにして、娘は横歩きにやつと乾板の前に立つた。娘は眼を精一杯に大きく見開き、當てもなく正面の扉を視つめてゐた。娘の膝には遊び事のをりの傷痕があり、靴下には目立たぬやうに母親の苦心した織ぎがあつた。——電燈が消えた。と、小さい肋骨が何の謎も持たずに、單純に、明瞭にそこに映つてゐた。ジローはこの影像の肋骨に眼鏡を擦りつけんばかりにして、検査しはじめた。

「ふむ、ふむ。——奥さん御覽下さい。これが肺腺といふところです。鎖骨、肺部、これが横隔

膜。この動いてゐるのが心臓です。おや、お嬢さん、まだ恐がつてゐますね。心臓の動悸のうつり方でちやんと分りますよ」

圖星を刺されたといふ工合で、ジローの指差した處には薄黒い袋が奇妙な形に激しく揺れてゐた。

「なるほど、此處のところですね、御近所のお醫者さんが注意したといふのは。——そら、細かい網目のやうなものが少し黒くなつて、モヤモヤと散つてゐるでせう。——石灰化してゐる部分が多いから、このモヤモヤの皆が皆、いま悪くなつてゐる場所といふではありません。ありませんが、しかし、これは滋養劑を第一に飲んで戴くとして、當分の間一週に一度づつお連れを願ひませうか。奥さんのお務めの終つた後で結構。私の表向きの診察時間の濟んだところでお待ちしますから。——よろしい！」

ジローの合圖で寫眞を二枚撮る音が起つた。しかし暗闇のなかでジツドは、娘のばかりではない、母親の、ジローの、助手の、そして自分自身の肋骨を感じた。動いてゐる心臓を感じた。五つの動物性をありありと感じた。それらの肋骨は寒帯の木のやうに枝をしつかり張つて少しづつでも伸びようとして居り、心臓は日光の透らない深海の魚類のやうに忍耐強く喘いでゐた。

この瞬間、ジツドの生命は他の四つの生命に不思議な親しみを感じた。種族を感じた。「仲間」を感じた。

この小説家らしい想像が彼をしばらく無言にした。——彼がエルアファイに教へて、それゆゑにエルアファイが沙漠の中で全身をもつて傲慢になつたといふ同じ理由のために、ジツドはその何分かの間巴里のランブラン街の「共同」建物のなかで、すぐ横に立つてゐる混血兒の細君にも増して市民らしく謙讓になつてゐた。

電流のぼんやりした照り返しを受けて、彼は娘の骨を眼のあたり見せられたエルアファイの細君が恐怖のあまり十字を切るのを見かけた。しかしそれは聖母マリアへであつた。彼の守護神の——永遠回歸の動物力へではなかつた。

明るくなつた時に、ジローは急いで涙を拭いた痕のあるエルアファイの細君と、肩で息をしてやうやく耐えてゐた娘とを陽氣に見廻した。黒い幕を晴れ晴れしくあけると、ジローの三階の窓からはモンソウ公園の植木が裏葉を返して、アンリ・ルツソオの繪のやうに素朴であつた。……

(昭和三年十月)

後序

「南京六月祭」は私の第二創作集にあたる。つまり純粹な單行本の形をとる創作集としては、大正十二年版の「一つの時代」以來のものである。私の第二創作集の出版はさまざまの作家にくらべて少し遅い。しかしその代りに、私はこの集に収める作品を何度か選び替へた。それから幾つかの作品を處處書き直した。

こゝには十一の短篇を集めてある。しかし年代順に云つて、その十一のうちの最初のものと最近のものとの間には、相當に大きい變化がある。この本から出る聲はそれ故ひと色でない。しかし私はいま、その儘を抛り出して讀者に贈らうと思ふ。

私は大分溜つて來た作品の荷物をひと纏めに投げ出す事で、こゝのところ又身輕になつた。身輕になると更に私は歩き易い。

装幀は今度も小穴隆一氏の御厚意を蒙つた。

昭和四年一月

犬

養

健

昭和四年四月二十三日印
昭和四年四月二十七日發行

版權
所有

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

著者

犬養健

發行者

山本三生

印刷者

椎名昇
東京市芝區田村町十五番地

南京六月祭
定價金貳圓

改造社

電話芝(43) 振替東京八四〇
四三二一 番番番番番番

(新裝社型本)

新選名作集

Table listing authors and their works, including 新岡本綺堂集, 新前田河廣二郎集, 新長田幹彦集, 新横光利一集, 新森鷗外集, 新吉田絃二郎集, 新近松秋江集, 新里見弴集, 新佐藤春夫集, 新夏目漱石集.

新選名作集

Table listing authors and their works, including 新小山内薫集, 新久保田万太郎集, 新宇野浩二集, 新北原白秋集, 新近松秋江集, 新里見弴集, 新佐藤春夫集, 新夏目漱石集.

新選名作集

新山本有三集

新久米正雄集

新室生犀星集

(長篇小説)生きとし生けるもの。(戯曲)多門と七郎右衛門。スサノヲの命。父親。...

四六判 並製 八ボイント二段組 定價 壹圓 送料 二十錢

大佛次郎著

赤穂浪士(上卷)

赤穂浪士(中卷)

赤穂浪士(下卷)

ごろつつき船

朝日に匂ふ山櫻と稱へられた日本武士道の精華! これぞ元祿の快擧、人も知る赤穂浪士の仇討である。...

四六判 上製 定價 壹圓五十錢 送料 二十錢

改造文庫

第一部

- 第十篇 社會主義の發展 エンゲルス著(1)
第十一篇 マルクシズム認識論 デイツゲン著(1)
第十二篇 辯證法的唯物觀 デイツゲン著(2)
第十三篇 哲學の實果 デイツゲン著(1)
第十四篇 神と國家 パクニニ著(1)
第十五篇 婦人論 ベル著(6)
第十六篇 エミール(上卷) ルーソウ著(4)
第十七篇 エミール(下卷) ルーソウ著(4)
第十八篇 國家論 オッペンハイム著(2)
第十九篇 金融資本論 猪俣津四郎著(4)
第二十篇 日本開化小史 田口卯吉著(2)
第二十一篇 日本經濟論 田口卯吉著(1)
第二十二篇 日本經濟學要領 龍本誠一著(近)
第二十三篇 經濟的帝國論 龍本誠一著(近)
第二十四篇 日本商業史 横井時冬著(4)
第二十五篇 日本工業史 横井時冬著(4)
第二十六篇 經濟學の實際知識 高橋龜吉著(2)
第二十七篇 リツケルト論文集 リツケルト著(2)
第二十八篇 工女哀史 細井和喜著(4)
第二十九篇 社會進化と婦人の地位 フラッパト著(2)
第三十篇 幸徳秋水集 幸徳秋水著(近)

第二部

- 第三十七篇 中江兆民集 中江兆民著(2)
第三十八篇 財產起原論 克己著(1)
第三十九篇 俳諧七部集 萩原羅月校訂(3)
第四十篇 蕪村七部集 萩原羅月校訂(近)
第四十一篇 神皇正統記 宮地直一校訂(近)
第四十二篇 芭蕉翁文選集 萩原羅月校訂(3)
第四十三篇 北村透谷選集 藤村編(1)
第四十四篇 樋口一葉選集 藤村編(1)
第四十五篇 平家物語 二葉亭主人著(1)
第四十六篇 坊っちゃん 百目漱石著(2)
第四十七篇 草枕 夏目漱石著(2)
第四十八篇 我々の一團と彼具砂ら 夏目漱石著(3)
第四十九篇 悲しき玩砂 石川啄木著(2)
第五十篇 雲は天を去る 石川啄木著(1)
第五十一篇 山陰土産その他 鳥崎藤村著(2)
第五十二篇 作曲白秋民謡集 北原白秋著(2)
第五十三篇 厭世家の誕生日 佐藤春夫著(1)
第五十四篇 労働者の居ない船 横光利一著(1)
第五十五篇 海に生くる人々 葉山嘉樹著(1)
第五十六篇 小公子 葉山嘉樹著(2)
第五十七篇 ホワイイトラング 若松睦子著(2)
第五十八篇 子 若松睦子著(2)
第五十九篇 子 若松睦子著(2)
第六十篇 子 若松睦子著(2)

此文庫は、内容の精選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。
此文庫 収容するものは、東西古今百種の書に亘り、校訂、註釋、翻譯、總て典據たるべきを期す。
此文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百種に及ぶ。
刊紙上の番號は單に刊行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜をも考慮に容れて之を示す。
一冊の分量は、約百頁以上五百頁以下とし、定價は約百頁を單位として拾錢とし、その冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす。但し地圖附録等挿入の場合には、必ずしもこの例に依らず。
表紙意匠中、1は十錢、2は二十錢、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。送料1は二錢、2は四錢、3は六錢、以下之に倣ひ二錢増し。
定價及び送料左表の如し

Table with 2 columns: 表紙意匠 (Cover Design) and 送料 (Shipping Fee). Rows 1-8.

厨川白村全集 (全六卷)

文藝批評の最高指針

一世を風靡せる文藝批評家、白村厨川辰夫の現代に遺せる足跡の如何に大なるかを思へ。而も彼猶幽冥にありて不斷に現代文明の方向を指示す。その透徹せる論理、その豊かなる文藻は現代に生くる人を文化の先導者たらしめざるやまず。げに「文は人なり」とは、白村に至りて完全に表現せらる。本誌今、彼の全集を満腔の熱意を以て現代の人士に贈る。來つて此の文藝指導の全集を緝け。

近代文壇の概論

第一節 序論 一、語言、二、時代の概論。 第二節 近代生活 一、世紀末、二、道徳的方面、三、復讐及び神祕的傾向、四、劇的傾向、五、近代の思潮(其の一) 一、世紀の病、二、哲學と宗教、三、懷疑と個人主義、四、物質的機械的の人生觀、五、思想界の暗潮、六、近代思潮と文藝、七、文藝上の南歐北歐及び英國、八、自然主義(其の一) 一、過去の一瞥、二、浪漫主義より自然主義へ、三、自然主義(其二) 一、その名稱、二、自然主義の由來、三、科學的製作法、四、論じるべき性質の描寫、五、個性の描寫、六、印象主義、七、短篇小説及び近代劇、八、最近思潮の總論 一、新しき努力の時代、二、最近思潮の總論、三、新派文壇、四、非物質主義の文壇(其の一) 一、新派文壇、二、文壇の進化、三、最近文壇史上の事實、四、非物質主義の文壇(其二) 一、心理學、二、最近文壇の傾向、三、象徵主義、四、就學派と近代の詩人

文藝思潮論

第一節 序論 第二節 思潮史(四編) 一、一、肉の帝國、二、肉の曙光、三、思潮史の第一編

最近英語概論

第一章 英國近代詩壇の革新 一、節 佛國革命前後の詩壇、二、節 詩壇の革新、三、節 最近英語文學の概論、四、節 新時代の代表的詩人 一、第一節 テニソン、二、節 ブラウニング、三、節 懷疑派の詩人、四、節 第五卷 スバズモディック派の詩人、五、節 ラファエル前派(P.R.B.) 一、第一節 詩人ロセッティ兄弟、二、節 この詩壇の詩人象牙の塔を出て、三、節 社會主義の生活、四、節 肉より肉へ、肉より肉へ、五、節 藝術の表現、六、節 藝術と問題を描ける文學と文學者、七、節 藝術家としての漫筆、八、節 現代文學の主流、九、節 藝術より社會改造へ、十、節 英語の研究に就て(英文)

十字街頭を往く

十字街頭を往く 僧正イノグを往く。文學上の惡魔の宗教。僧正イノグを往く。文學上のアリズム。文藝と性慾。再び民衆の手に。演劇の觀察。西洋「純性」の淫。強ひられたる文明。有島さんの最後。戀愛と結婚のこと。オオブン・フオム。何が故の偏見と。東西の自然詩觀。裸體美術の問題。西班牙劇壇の將星。ゴルスワージーの劇論。ダンセイニの邦人。婦人と體。小泉先生の書房を訪ふ。詩人クロオデル。人間觀(其の二)。

小泉先生そのほか

小泉先生そのほか 果して遺棄の罪か。病的性慾と文學。ルウエイルの遺棄。お伽噺の語。わかき藝術家のむれ。詩人ワンレルベル。現代英國文壇の奇蹟。奇文一篇。ゲルツトンの表。新派文壇の老女。ベルナルドの今昔。ケルト文壇復興論。アナルワル。フランス。廣く散らす。平和の勝利。

北米印記

北米印記 左脚切斷。太平洋上より。ジャック・ロンドの小説。文壇通。ナイヤガラを具物せざる。無名劇の復興。愛國文學の新年。歐洲諸國と海外文學。米國の新聞。米國の文學。米國研究に就する。書籍。文字新聞より。

豫約規定

體裁 本文四六判、九ボイント、一段綴、一冊紙數平均五百頁、上製函入裝。 頒布方法 全六卷豫約者のみ。一冊づつ。一冊切手にて最寄。書店又は本社へ御申込下さい。 刊行期日 昭和四年二月第一回を刊行し、以後毎月一冊づつ、一冊づつを刊行し、昭和四年七月を以て完了す。

申込先

申込先 御申込の際、御申込金として金管面を御持込み下さい。これは最後の月の會費にあつて、この月の會費は別に御持込みを願ひます。 御申込金は中途御解約の方へは御持戻し致しません(前金一時掛の方は申込金を要しません)。

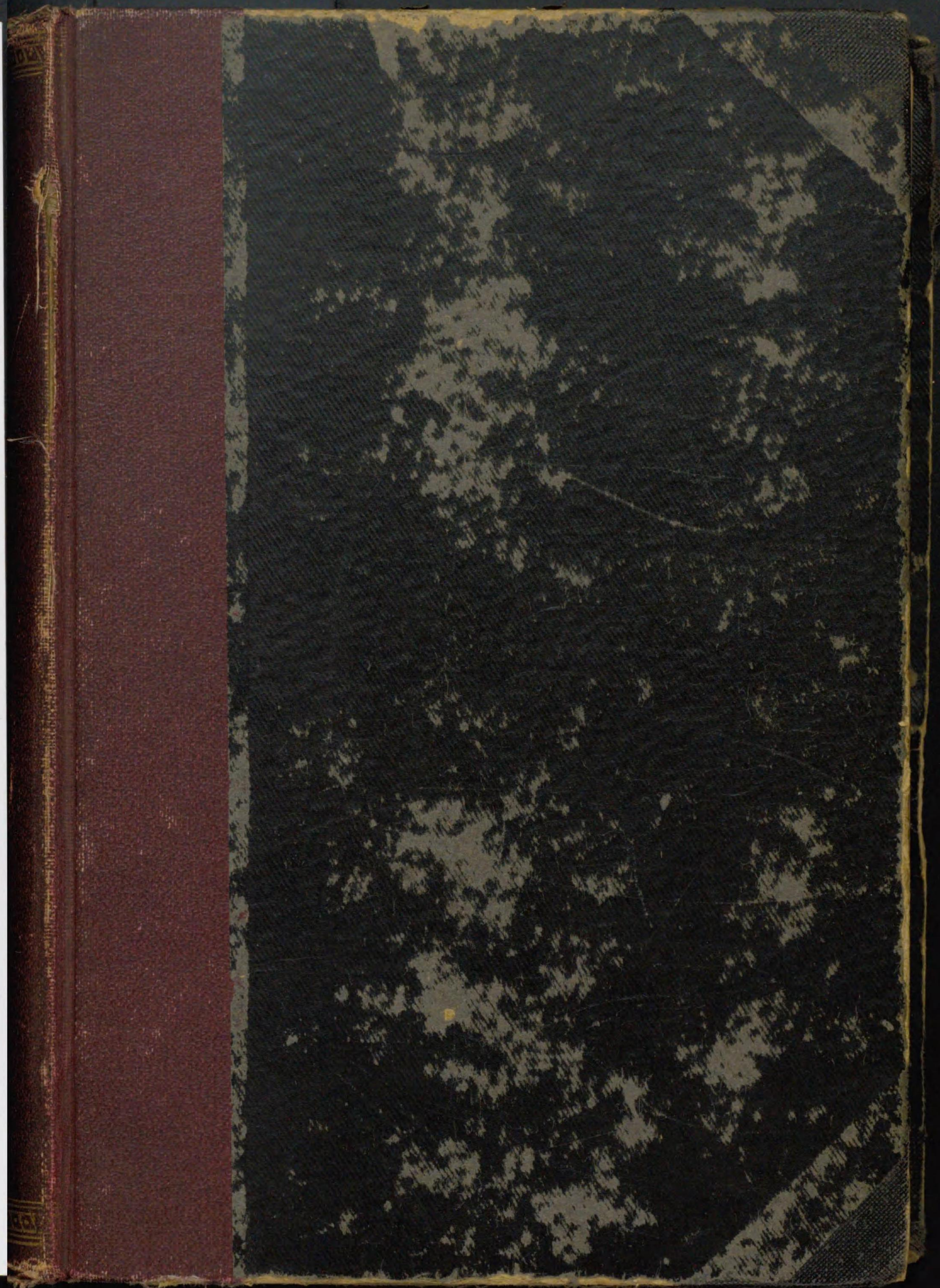
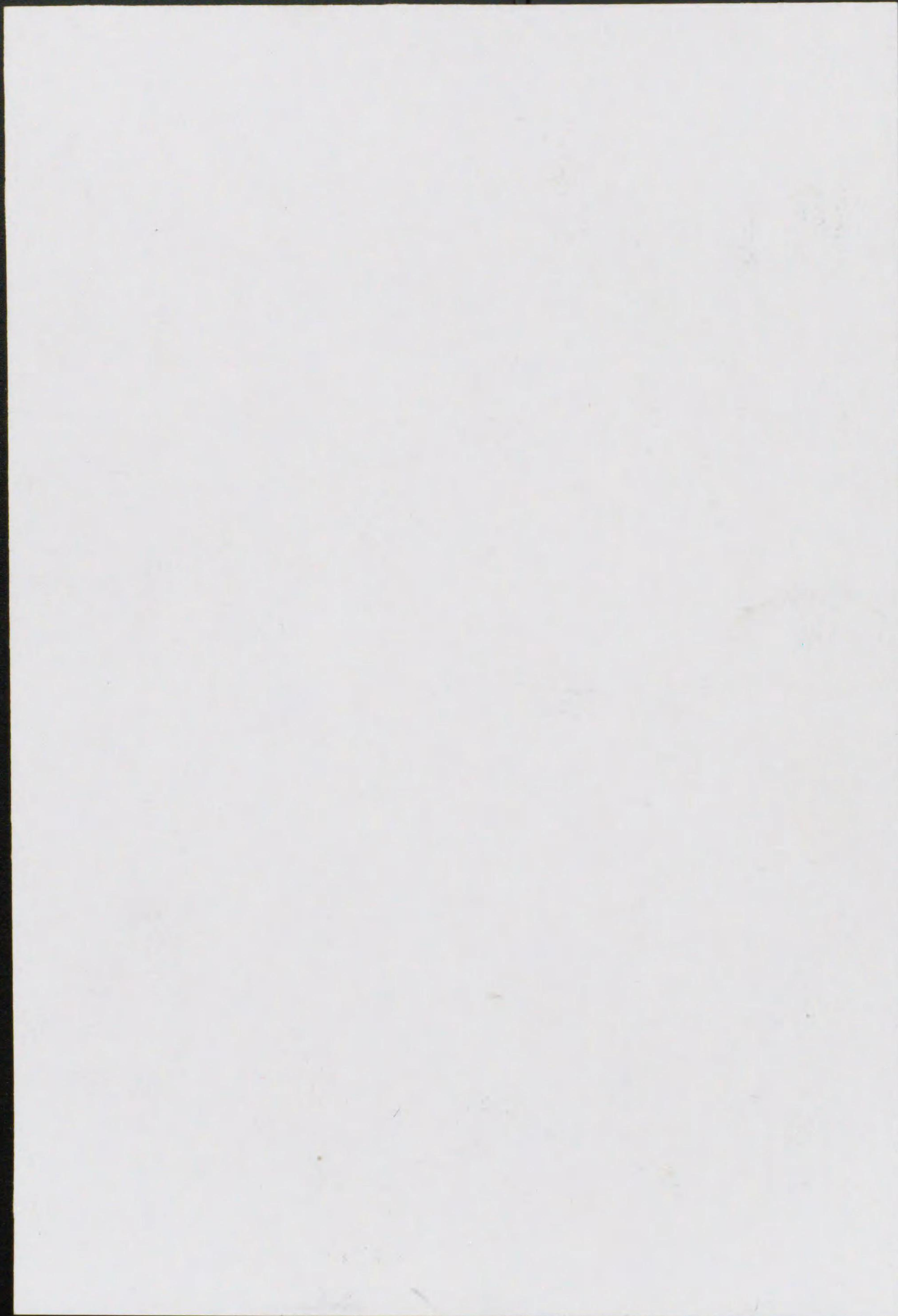
會費

會費 (一) 毎月一冊に付、會費(二) 全六冊五円八拾錢を申受ます。 送送料 會費の他に左の送送料を申受ます。 寄附に付十四錢、尙書得送附を希望せらるゝ向は別に會費料掛金を御持下さる。東京市内六錢、會費は大銀増し。 拂込方法 振替貯金又は爲替でその月の一日まで着せしめ、御持込下さる。但し郵便切手代用は寄附者に願ひます。

申込締切期日

申込締切期日 昭和四年三月廿八日

568
379

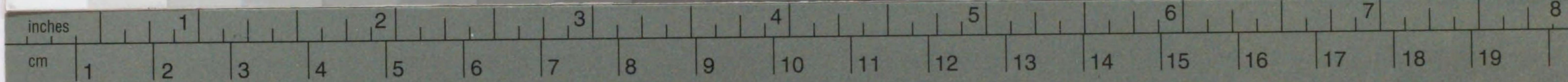


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

